

京都府埋蔵文化財情報

第 24 号

昭和62年度発掘調査予定の遺跡	山口 博	1
昭和61年度京都府下埋蔵文化財の調査	田代 弘	5
野崎遺跡の削平された古墳群	小山 雅人	17
—昭和61年度発掘調査略報—		27
20. 平山城館跡	23. 長岡京跡右京第251・255次	
21. 青野遺跡第11次	24. 平安京跡(左京北辺三坊五町)	
22. 長岡宮跡第185次	・内膳町遺跡	
	25. 上人ヶ平遺跡	
紹介『京都府埋蔵文化財論集』	都出比呂志	41
資料紹介 森本遺跡の人面付土器	國下多美樹	47
府下遺跡紹介 36. 広隆寺旧境内		50
長岡京跡調査だより		55
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧		59
センターの動向		60
受贈図書一覧		62

1987年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 野崎遺跡の削平された古墳群



(1) 野崎古墳群全景 (空中写真, 左が北)



(2) 野崎1号墳, 2~4号埴輪出土状況 (南西から)

昭和62年度 発掘調査予定の遺跡

山 口 博

当調査研究センターが発足して7年目を迎え、今年度も多くの調査が予定されている。事業量は年々増加の傾向にあり、昨年度は、調査受託28件、遺跡数41件について調査を実施した。また、昨年度はセンターが発足してから満5年が経過したことを記念して、5周年誌を刊行するなどの事業も行った。

今年度の発掘調査事業は、すでに受託して現地の発掘調査を開始しているもの及び近く受託が予定されているものをあわせ、別表のとおり24件、遺跡数にして50件余りが予定されている。なお、この24件のうち4件は、遺物整理を行うものである。前年度からの継続事業は、15件と半数以上を数えるが、63年の京都国体に関連したものは、ほぼ峠を越した感がある。かわって、丹後の国営農地開発や京阪奈丘陵開発に伴う団地造成などが、事業量としては増加の傾向にある。ただ、やはり調査の多くは、道路事業に関連したものが占めている。今年度の人員体制は、事務局長以下計39名であるが、事業を円滑に進めるに当たって、調査課を2課に分け、係制を導入した。今年度からは、3課6係の体制で各事業に対処することになる。それでは、以下に今年度調査予定の遺跡の概要を記す。

1 橋爪遺跡は、府立学校の校舎改築に伴う調査で、過去の調査で弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が検出されている。その他、今年度調査が予定されている府立学校関係の遺跡としては、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が検出されている蒲生遺跡、古墳時代前期の流路・土壇群を検出した上中遺跡、それから平安京跡、園部城跡、亀山城跡がある。

2 谷内遺跡は、古墳時代前期や奈良・平安時代の集落跡の検出が期待される。昨年度は、多量の古墳時代前期の土器や石製帯飾り等が出土している。

3 高山古墳群ほかは、国営農地開発に伴う調査で、多数の古墳の検出が期待される。

4 茂津窯跡は、奈良時代の須恵器片が採集されている。府道の改良工事に伴い調査する。

5 桑飼上遺跡、7 青野遺跡は、いずれも由良川の自然堤防上に立地する遺跡で、前者は弥生時代から中世に至る土器が散布しており、後者は弥生・古墳時代の住居跡等が検出されており、いずれも多大な成果が予想される。

6 三宅遺跡ほかは、近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う調査で、今年度は10遺跡の調査

が予定されている。弥生～平安時代の集落跡や古墳、城跡等の検出が期待される。そのほか、過去に福知山市域で行った宮遺跡以下15か所の近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の整理・報告も併せて行う予定である。

8 岡安城跡ほかは、工業団地造成に伴う調査で、今年度は城跡2か所と試掘調査を行う。

9 千代川遺跡ほかは、国道9号バイパス建設に伴う調査で、今年度はほかに古墳1基の調査が予定されている。千代川遺跡は、丹波国府推定地の西端にも当り、過去の調査で、

昭和62年度 発掘調査予定遺跡一覧表

番号	名 称	種 別	所 在 地	原因工事	調査対象面積	調査予定期間	備 考
1	橋爪遺跡ほか	集落跡ほか	久美浜町ほか	校舎改築	2,650㎡	7～10月	新規
2	谷内遺跡	集落跡	大宮町谷内	圃場整備	500㎡	5～7月	継続
3	高山古墳群ほか	古墳ほか	丹後町・弥栄町・久美浜町	国営農場	5,000㎡	4～12月	〃
4	茂津窯跡	窯跡	舞鶴市志高	道路改良	200㎡	9～10月	新規
5	桑飼上遺跡	散布地	舞鶴市桑飼上	河川改修	2,000㎡	6～10月	〃
6	三宅遺跡ほか	散布地ほか	綾部市豊里町ほか	道路建設	9,500㎡	4～2月	継続 整理報告含む。
7	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	道路建設	600㎡	7～8月	〃
8	岡安城跡ほか	城館跡ほか	綾部市小呂町ほか	団地造成	900㎡	6～8月	〃
9	千代川遺跡ほか	集落跡ほか	亀岡市千代川町ほか	道路建設	4,800㎡	5～12月	〃
10	平安京跡	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	800㎡	1～3月	新規
11	平安京跡	都城跡	京都市上京区	庁舎建設	400㎡	4～5月	継続
12	長岡京跡	都城跡	向日市・長岡京市	道路改良	1,400㎡	11～2月	新規
13	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	道路建設	800㎡	9～12月	〃
14	長岡京跡	都城跡	長岡京市開田	交通安全	100㎡	6～7月	〃
15	長岡京跡	都城跡	長岡京市粟生	道路改良	900㎡	8～11月	継続
16	長岡京跡	都城跡	向日市	庁舎建設	650㎡	9～12月	新規
17	小田垣内遺跡ほか	城館跡ほか	田辺町・精華町	道路建設	1,000㎡	5～8月	継続
18	恭仁京作り道跡	都城跡	木津町相楽	道路建設	350㎡	7～8月	〃
19	上人ヶ平遺跡ほか	集落跡ほか	木津町市坂ほか	団地造成	5,200㎡	4～1月	〃
20	八ヶ坪遺跡	集落跡	木津町相楽	道路改良	350㎡	9～10月	新規
21	志高遺跡	集落跡	舞鶴市志高	河川改修	—	4～3月	継続遺物整理
22	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠	道路建設	—	4～3月	〃 〃
23	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市八幡	庁舎建設	—	6～3月	〃 整理報告
24	長岡宮跡	都城跡	向日市上植野町	庁舎改築	—	4～5月	〃 〃

奈良時代の建物跡や墨書土器が検出されている。また、他に弥生時代の住居跡・溝、古墳時代の流路・土壇、鎌倉時代の建物跡・井戸等も検出され、縄文土器も出土しており、今年もその成果が期待される。

10平安京跡は京都府庁舎の、11平安京跡は府民ホール(仮称)の建設工事に伴う調査で、後者は昨年度からの継続調査である。昨年度の調査では、平安～江戸時代の各時代の井戸や土壇等が検出され、緑釉・灰釉陶器や石製帯飾り、金箔瓦をはじめとして、多量の遺物が出土している。



昭和62年度 発掘調査予定遺跡位置図

12～16は、長岡京跡に関連するもので、13は長岡京跡の西二坊大路の推定地に当たるとともに、弥生時代から鎌倉・室町時代にかけての集落跡である今里遺跡の範囲にも相当する。また14は、塚本古墳の周濠の検出が予想される場所であり、近辺では長岡京期の遺構も数多く検出されている。15は、昨年度からの継続調査で、古墳時代や平安・鎌倉時代の遺構等が昨年度検出されている。

17小田垣内遺跡ほかは、京奈バイパス建設に伴う調査で、今年度はほかに南稻八妻城跡、樋ノ口遺跡等が予定されている。

18恭仁京作り道跡は、国道163号線バイパス建設に伴う調査で、恭仁京の作り道が推定されている場所である。京域の調査としては初例となる。また、調査地は奈良時代の土器が散布する八後遺跡にも相当する。

19上人ヶ平遺跡ほかは、住宅・都市整備公団の団地造成に伴うもので、今年度は5か所の調査を予定している。上人ヶ平遺跡は、過去の調査で奈良時代の建物跡や溝、古墳の周濠等を検出している。近辺には古墳が散在し、平城京に瓦を供給した窯跡等が存在する。

20八ヶ坪遺跡は、府道の改良工事に伴い調査するもので、古墳時代や奈良時代、鎌倉・室町時代の遺構・遺物の検出が期待される。

21志高遺跡は、昨年度で現地調査を終了し、今年度は59～61年度に行った調査の遺物整理を行うものである。この遺跡からは、縄文～江戸時代に至る多量の遺物が出土している。

22篠窯跡群も現地調査は昨年で終了し、その成果の総括的な整理を行っている。

23木津川河床遺跡、24長岡宮跡は、昨年度調査の整理及び概要報告を行うものである。

以上が今年度予定されている発掘調査事業であるが、このほか年6回の研修会及び年1回の講演会、前年度の調査成果を展示する展覧会等を実施する。特に今年度は、講演会を「景初四年銘鏡をめぐる諸問題」と題して、10月1日に従来に比べ大規模に行う予定である。また、展覧会は8月下旬～9月上旬にかけて、向日市文化資料館の協力を得て同館内で開催する予定であるが、さらに今年度は、巡回展「景初四年銘鏡と芝ヶ原古墳」を主催者の一員として同時期に向日市文化資料館とともに実施する予定である。研究助成事業は「京都府における弥生式土器の編年的研究」の最終まとめを行う。刊行物は、本誌や各遺跡の調査報告書を刊行する。

体制も変わり、新たな気持ちでこれらの事業を進めて行きたいものである。

(やまぐち・ひろし=当センター調査第1課企画係長兼資料係長)

昭和61年度 京都府下埋蔵文化財の調査

田 代 弘

京都府下における埋蔵文化財の調査は年ごとに増加する傾向にある。京都府教育委員会が集計した昭和61年度(1月から12月)の文化財保護法第57条、同58条の規定に基づく発掘調査届出書及び通知書の件数は156件を数えるに至っている^(注1)。

当調査研究センターでは、「国・公社・公団及び京都府が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」を行っているが、昭和61年度には各関係機関から27件の調査委託があった^(注2)。調査件数が一件であっても複数の遺跡が対象となる場合があるので、実際調査を実施した遺跡は別表のとおり41か所以上に及んでいる。

京都府下では、当調査研究センターのほかに、京都府教育委員会・各市町村教育委員会などの関係機関が各地でそれぞれ発掘調査を実施しており、重要な成果をおさめている。

昨年度の調査では、墳墓・古墳の調査が目立った。なかでも、舞鶴市志高遺跡の貼り石^(注3)方形周溝墓や景初四年の年号のある鏡が出土した福知山市広峯15号墳^(注4)、最古式の古墳の一つとみられる城陽市芝ヶ原12号墳^(注5)などは新聞紙上で大きく取り上げられ、記憶に新しいところである。

本稿では、当調査研究センターが昨年度に実施した調査の概要を地域ごとに述べ、紹介することにしたい。

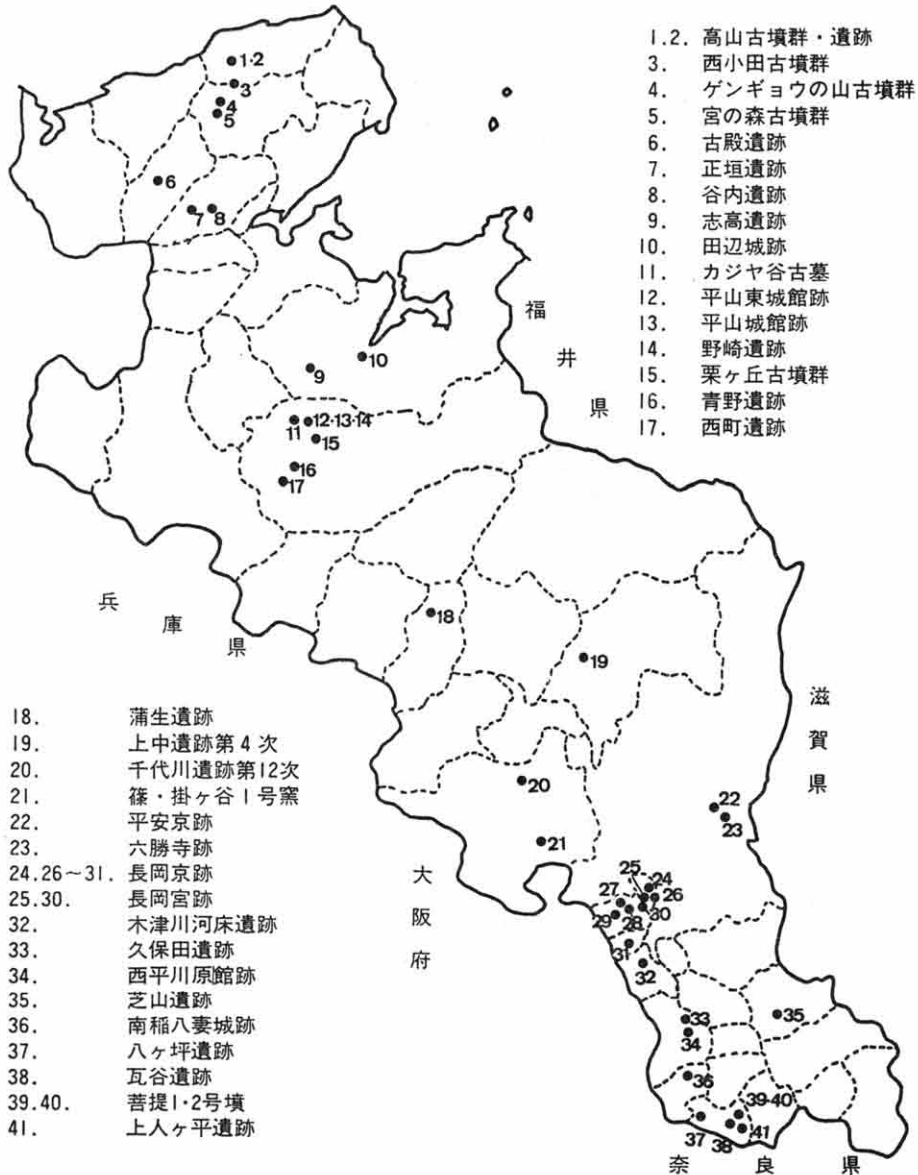
〔丹後地域の調査〕 この地域では高山古墳群・高山遺跡(1・2)、西小田古墳群(3)、ゲンギョウの山古墳群(4)、宮の森古墳群(5)、古殿遺跡(6)、正垣遺跡(7)、谷内遺跡(8)、志高遺跡(9)、田辺城跡(10)など、10か所の調査を行った。これらのうち、半数(1～5)は国営農地関係に伴う調査である。

高山古墳群は12基からなる後期古墳群である。1・2号墳を京都府教育委員会が、3から6号墳を当調査研究センターが調査した。調査の結果、いずれも横穴式石室を内部主体とし、6世紀末頃に築造され、7世紀中ごろまで幾度か追葬している古墳であることがわかった。石室は、片袖式のもの^(注6)と無袖式のものがある。3号墳は全長10.2mと規模が大きく、須恵器や玉類、銀装の大刀などの鉄製品を数多く保有していた。

高山遺跡は、高山古墳群と同一丘陵にある複合遺跡である。この遺跡では中～近世墓のほか、丘陵の東端で、古墳群と同時期の竪穴式住居跡を1基確認した。この住居跡は、一

辺5m×4.7mの方形で、一辺に石組のかまどが造り付けられていた。高山古墳群と同時期の^(注7)ものであり、古墳群に隣接する住居跡として注意しておく必要がある。

西小田古墳群では、4・5号墳の2基を調査した。どちらも木棺直葬で、地山を削り出して墳丘を造っており、盛土が極端に少ない台状墓的な古墳である。4号墳は6世紀末、5号墳は5世紀末から6世紀初頭ごろに築造されたものである。5号墳の墓壇の上面から^(注8)は、古式の腿が2個出土している。



昭和61年度 発掘調査実施遺跡位置図

昭和61年度 発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	高山古墳群	古墳	丹後町大字徳光小字高山	増田 孝彦 三好 博喜	61. 7. 19 ～62. 3. 14	円墳4基(横穴式石室)
2	高山遺跡	散布地	〃	増田 孝彦	61. 8. 20 ～62. 3. 14	竪穴式住居跡 中・近世墓
3	西小田古墳群	古墳	丹後町西小田・弥栄町国久	三好 博喜	61. 11. 20 ～62. 1. 22	円墳2基(木棺直葬) 土塚
4	ゲンギョウの山古墳群	古墳	弥栄町大字鳥取小字ゲンギョウ	三好 博喜	61. 6. 4 ～61. 10. 2	円墳8基(木棺直葬7基, 横穴式石室1基)
5	宮の森古墳群	古墳	弥栄町大字鳥取小字宮ノ森	増田 孝彦	61. 4. 24 ～61. 7. 19	円墳4基(木棺直葬)
6	古殿遺跡	集落跡	峰山町字古殿	鍋田 勇	61. 8. 4 ～61. 12. 2	古墳時代前期の溝
7	正垣遺跡	集落跡	大宮町奥大野正垣	竹原 一彦	61. 4. 14 ～61. 7. 13	弥生時代後期の溝, 古墳, 平安時代の掘立柱建物跡
8	谷内遺跡	集落跡	大宮町谷内	藤原 敏晃 鍋田 勇	61. 5. 8 ～61. 6. 26	弥生時代後期の溝
9	志高遺跡	集落跡	舞鶴市字志高	肥後 弘幸 三好 博喜	61. 4. 14 ～62. 3. 20	貼石方形周溝墓(弥生時代中期) 竪穴式住居跡 奈良・平安時代掘立柱建物跡
10	田辺城跡	城館跡	舞鶴市北田辺小字追手前	小山 雅人 田中 彰	61. 10. 23 ～61. 10. 30	顕著な遺構なし
11	カジヤ谷古墳	古墳	綾部市七百石町カジヤ谷	細川 康晴	62. 1. 29 ～62. 2. 14	積石遺構
12	平山東城館跡	城館跡	綾部市七百石町	藤原 敏晃	61. 9. 17 ～62. 3. 20	柱穴・土壘・堀
13	平山城館跡	城館跡	綾部市七百石町	藤原 敏晃	61. 11. 1 ～62. 3. 20	礎石・土壘・竪堀
14	野崎遺跡	古墳	綾部市高槻町	小山 雅人	61. 11. 28 ～62. 3. 24	前方後円墳1 円墳5
15	栗ヶ丘古墳群	古墳	綾部市小呂町田坂	引原 茂治	61. 7. 2 ～62. 3. 23	円墳9基(木棺直葬)
16	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町吉美前	西岸 秀文	61. 12. 3 ～62. 3. 20	竪穴式住居跡・溝・土塚
17	西町遺跡	集落跡	綾部市西町	西岸 秀文	61. 5. 27 ～61. 9. 12	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡
18	蒲生遺跡	集落跡	丹波町蒲生	森下 衛 西岸 秀文	61. 8. 25 ～61. 10. 9	土塚
19	上中遺跡第4次	集落跡	京北町下弓削	岡崎 研一	61. 8. 11 ～61. 9. 30	顕著な遺構なし
20	千代川遺跡第12次	集落跡	亀岡市千代川町	森下 衛	61. 5. 12 ～61. 12. 6	掘立柱建物跡
21	篠・掛ヶ谷1号窯跡	窯跡	亀岡市篠掛ヶ谷	岡崎 研一	61. 4. 24 ～61. 6. 9	顕著な遺構なし

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
22	平安京跡	都城跡	京都市上京区烏丸通 中立売上ル龍前町	伊野 近富 石井 清司	61.10.6 ～62.3.20	住居跡・井戸・石組遺構
23	六勝寺跡	寺院跡	京都市左京区岡崎西 天王町	竹原 一彦	61.7.10 ～61.7.20 61.9.1 ～61.12.6	尊勝寺観音堂跡(推定)
24	長岡京跡左京 第160次	都城跡	向日市森本町	竹井 治雄	61.10.18 ～61.12.3	長岡京期の溝
25	長岡宮跡第 172次	都城跡	向日市上植野町上川 原	竹井 治雄	61.4.17 ～61.6.24	顕著な遺構なし
26	長岡京跡左京 第151次	都城跡	向日市鶏冠井町清水 ほか	村尾 政人	61.4.30 ～61.8.30	長岡京の道路側溝 弥生時代の土坑
27	長岡京跡右京 第240次	都城跡	長岡京市井ノ内朝日 寺	石尾 政信	61.9.11 ～61.11.17	長岡京期の井戸
28	長岡京跡右京 第251次	都城跡	長岡京市粟生川久保 ・畑ヶ田	石尾 政信	61.12.9 ～62.3.14	古墳時代後期の土坑・溝 平安～中世の柱穴
29	長岡京跡右京 第255次	都城跡	長岡京市粟生川久保	石尾 政信 細川 康晴	62.2.6 ～62.3.20	柱穴
30	長岡宮跡第 185次	都城跡	向日市上植野町	竹井 治雄	62.1.26 ～62.3.12	旧流路
31	長岡京跡(立 会)	都城跡	向日市ほか	辻本 和美	61.10.23 ～62.3.16	顕著な遺構なし
32	木津川河床遺 跡	集落跡	八幡市八幡一丁畑ほ か	岩松 保	61.5.23 ～62.2.24	弥生時代の竪穴式住居跡 土坑 中世素掘り溝
33	久保田遺跡	散布地	田辺町大住字久保田 ほか	黒坪 一樹	61.11.7 ～62.2.6	
34	西平川原館跡	城館跡	田辺町三山木字西平 川原	石井 清司 黒坪 一樹	61.7.7 ～61.7.12	
35	芝山遺跡	集落跡 古墳	城陽市大字寺田小字 南中ノ芝	小池 寛	61.5.6 ～61.9.2	
36	南稲八妻城跡	城館跡	精華町南稲八妻	石井 清司 黒坪 一樹	61.8.2 ～61.9.25 62.2.25 ～62.3.19	顕著な遺構なし
37	八ヶ坪遺跡	散布地	木津町大字相楽小字 八ヶ坪	松井 忠春 荒川 史	61.8.25 ～61.12.10	古墳時代・中世の溝状遺構
38	瓦谷遺跡	散布地	木津町大字市坂小字 瓦谷	戸原 和人 伊賀 高弘	61.6.2 ～62.3.18	方墳, 溝
39 40	菩提1号墳 〃 2 〃	古墳	木津町大字市坂小字 向山	荒川 史	61.10.4 ～61.11.26	顕著な遺構なし
41	上人ヶ平遺跡	集落跡	木津町大字市坂小字 上人ヶ平	戸原 和人 荒川 史	61.12.11 ～62.3.14	古墳時代前期の竪穴式住居跡

ゲンギョウの山古墳群は、標高60mほどの丘陵上に連珠状に裾を接して作られた10基からなる古墳群である。丘陵先端の1基が横穴式石室であるほかは、すべて木棺直葬墳である。今回は石室墳(1号墳)と直葬墳7基(2～8号墳)の9基を調査した。

1号墳は、小型無袖の横穴式石室で、後期終末に築造されたものである。この石室は、奥壁に奥行1m・高さ40cm程の壇が作られているという珍しいものである。野田川町石川の高浪古墳に類例があり、これとあわせて性格の究明が待たれる。2～8号墳は、尾根を削って墳丘を成形した木棺直葬墳であり、5世紀前半代に築造時期の中心がある。墳丘築成や立地、築造時期の点において西小田古墳群や次に述べる宮の森古墳群と墳丘築成や立地、構成に同様の特質を持っている。^(注9)

宮の森古墳群は、ゲンギョウの山古墳群と同じ谷の中にあり、近接した位置にある。8基のうち1・2号墳、3・4号墳の4基を調査した。いずれも木棺直葬墳である。1号墳は6世紀前半、2号墳は6世紀中ごろの須恵器が副葬されていた。3・4号墳は5世紀代に築造されたものである。^(注10)

古殿遺跡では、弥生時代終末から古墳時代前期初頭にかけてつくられた溝および自然流路を確認している。溝には護岸工事のあとがみられ、堰なども設けられていた。土器と木器がたくさん埋没しており、木器のなかには各種建築部材とみられる加工木にまじって舟形木製品や火鑽白など、珍しいものもあった。^(注11)

正垣遺跡は、ほ場整備関係の遺跡として前年度からの継続調査である。近年は、昨年確認した奈良時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡の延長部分のほか、6世紀後半に築造された古墳の残骸1基を確認した。^(注12)

谷内遺跡では、弥生時代後期終末の流路を確認した。土器とともに木製の庖丁(穂摘具)などを検出した。木製庖丁は丹波・丹後地域では初めての発見である。^(注13)

志高遺跡は由良川下流域を代表する複合集落遺跡である。今回で第7次めの調査になった。縄文時代から奈良・平安時代まで遺構が密にみられ、どの時代の遺構面でも重要な発見が相次いだ。なかでも、縄文時代草創期の土器群と弥生時代中期(第4様式)の貼り石のある方形周溝墓の発見が特に注目される。

縄文草創期の土器には、隆起線文、爪形文、異条斜縄文などの文様をもつものがあった。器種や文様群の構成、分布などの点で研究史上、大きな問題を投げかけることになりそうである。貼り石のある方形周溝墓はあわせて3基を確認した。どれも一部を確認しただけであるので正確な規模はわからないが、一番大きなものの長辺を測ってみると約16mあった。貼り石は人頭大のやや加工した石を用い、側縁に丁寧に施工されていた。山陰や山陽地域にみる四隅突出墓の初源期のものと同種のものであろうか。^(注14)

〔中丹地域の調査〕 中丹地域では、カジャ谷古墓(11)、平山東城館跡(12)、平山城館跡(13)、野崎遺跡(14)、栗ヶ丘古墳群(15)、青野遺跡(16)、西町遺跡(17)など7件の調査を行った。11～14は近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴う調査である。近畿自動車道舞鶴線は、これまでに福知山市域を中心とする第7次区間の調査を行ってきたが、昭和61年度から第8次区間の調査が始まり綾部市域に調査の主体が移った。

平山東城館跡は、高城城の支城と考えられる城館跡で、平山城館跡と一連のものである。城の形状は東西30m・南北40mを測る長方形をした単郭のものである。南側に土塁と空堀が巡る。郭内を面的に調査した結果、掘立柱建物跡、土坑などを検出した。15世紀から16世紀にかけての陶磁器類が出土しており、城の築造時期・継続時期を考える上で参考になる。綾部市域には数多くの山城があるが、本格的な発掘調査が行われた例は今回が初めてである。^(注15)

野崎遺跡は、当初、集落遺跡を想定して調査に着手したが、発掘の結果古墳であることがわかった。低位の丘陵の上に6基の古墳が裾を接して作られており、そのうち1基は前方後円墳(残りの5基は円墳)であった。墳丘はすべて削平されて周溝だけが残っており、主体部や外表施設を明らかにできるものはない。いくつかの古墳に周溝が途切れて陸橋のようになった部分がみられ、この古墳群の特色となっている。遺物は、主に周溝内から出土している。1号墳の周溝では、墳丘から落ちて割れた状態で円筒埴輪や家形埴輪が、3号墳の周溝からは鏡や獣を模した小形の土製品などが出土している。当古墳群は、出土遺物からみて5世紀末に築造が始まり、6世紀半ごろまで順次築造されたものと考えられることができる。なお、5号墳(前方後円墳)は全長28m・後円部径20mを測る。円墳は最大のもので3号墳で、直径17mである。^(注16)

栗ヶ丘古墳群の発掘調査は、綾部工業団地造成工事に伴って実施しているもので、2年めの調査になる。古墳群は12基の円墳で構成されており、このうち昭和60年度に3基、昭和61年度に6基、合計9基を調査した。いずれも木棺直葬の円墳で、6世紀中葉から後葉にかけて継続的に築造されたことがわかっている。墳丘は盛土を主体とし、群中に横穴式石室を含まないなど後期古墳群としては異色である。^(注17) 同市田坂野古墳群にも同様の傾向がみられる。横穴式石室導入が遅れる中丹地域の地域的な特色であろう。

青野遺跡は、福知山市石本遺跡やさきに述べた舞鶴市志高遺跡とならぶ由良川中・下流域屈指の複合集落遺跡である。昨年度は、第1次・第9調査地の隣接地点を調査した。弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴式住居跡10基、弥生時代中期の土坑16基、各時代にわたる溝など多種・多様な遺構及び遺物を確認した。遺物には貴重なものが多いが、なかでも弥生時代中期の土坑から出土したサヌキトイド製石小刀は、丹波・丹後では初出の

ものとしてばかりでなく、同器種の分布地域を拡大するものとして注目される。^(注18)

西町遺跡では、鎌倉時代の掘立柱建物跡を多数確認した。この時期の遺構は綾部地域ではまだあまり確認されておらず貴重な事例の追加となった。^(注19)

〔南丹地域の調査〕 蒲生遺跡(18)、上中遺跡(19)、千代川遺跡第12次(20)、篠掛ヶ谷1号窯(21)などの調査を行った。この地域は、これまで調査件数の多い地域であったが、篠窯跡群の調査が整理報告業務を残してほぼ終了したことや、国道9号バイパス関係遺跡でも調査が千代川遺跡関係に限定されてきたことなどから、昨年度は従来になく調査件数が少ない年となった。遺構がまとまって検出できたのは千代川遺跡だけであったので、この遺跡についてのみ要点を記しておくことにしたい。

千代川遺跡の調査は、昭和59年度以降は国府推定域の西辺部を調査の対象としており、国府跡を確定する有力な証拠が得られる可能性が高いとして期待がかけられてきた。しかし、調査範囲内においては国府関連遺構と断定する資料を得るまでに至っていない。昨年も同様であった。ただし、奈良・平安時代の掘立柱建物跡をはじめとする生活遺構や墨書土器・緑釉陶器などを多数確認していることなどから、単なる農耕集落と言うよりは官衙的色彩の強い遺跡であることを指摘することができる。^(注20)

〔京都市域・乙訓地域の調査〕 京都市域では、平安京跡(22)と六勝寺跡(23)の2か所、乙訓地域では長岡京跡(24・26～31)、長岡宮跡(25・30)など7か所の発掘調査と立会調査1件を実施した。

平安京跡の調査地は、京都御所の西隣に位置する旧知事公舎跡である。平安京左京一条三坊五町及び内膳町遺跡の一角にあたる。調査の結果、弥生時代前期の土坑をはじめ、平安時代から近世にわたる各時代の生活跡関連の遺構などを調査地全面で確認した。平安時代中期の井戸や道路跡、中世から近世の建物跡や井戸とともに多数の遺物を得ている。^(注21)

六勝寺跡の調査では、推定尊勝寺跡の範囲内で桁行10間(110尺)・梁行6間(64尺)の瓦葺礎石建物を確認した。この建物は、周囲に12尺の庇と7尺の縁を巡らせており、亀腹の基壇を持つ。基壇の下縁は、回縁の中軸線上にあり、回縁の外側には幅約40cmの雨落ち溝があった。雨落ち溝は石を敷いて丁寧に作られており、南面中央部分には幅90cm・長さ9.6mの張り出し部分が設けられていた。この部分は階段が敷設された場所と考えられる。遺物は瓦が大変に多く、土器などの日常什器はあまりみられなかった。これらは12から13世紀初頭に作られたものが多い。規模や検出位置、時期などからこの建物を尊勝寺観音堂跡と推定している。^(注22)

長岡京跡右京第240次調査では、長岡京期に作られた大きな井戸を確認している。井戸は、上面の掘形が一辺5.8mを測り、三段の掘形を持っている。底面付近で縦板組の井戸枠が半壊状態で検出されている。井戸の中からは、わずかであったが須恵器・土師器・緑釉陶器・土馬・ミニチュアの竈・鉄器(鋤先)^(注23)などが出土した。

長岡京跡右京第251次調査地は右京二条四坊五町・十二町と西四坊坊間小路の推定地に当る。長岡京跡に関する遺構は検出できなかったが、古墳時代後期の土坑や平安時代以降の溝などを確認した。須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・弥生土器などが出土している。^(注24)

長岡京跡左京第151次調査は名神高速道路関係の調査である。現道の両側に長いトレンチを設定して調査にあたった。調査の結果、長岡京の二条大路南北両側溝や三条第1小路、東三坊第1小路西側溝、長岡京期の掘立柱建物跡や柵列、古墳時代の水田跡と足跡、弥生時代の土坑、溝などを検出した。このうち長岡京期の掘立柱建物跡の柱穴からは「越前国大野郡」と記載された木簡が出土した。また、弥生時代の土坑からは第Ⅱ様式の土器とともに碧玉製管玉の未製品などの注目すべき遺物が多数みつまっている。今回の調査地点は弥生時代の遺跡としては鶏冠井清水遺跡推定地にあっており、この遺跡の時期と範囲について大きな情報をもたらすことになった。^(注25)

〔南山城地域の調査〕木津川河床遺跡(32)、久保田遺跡(33)、西平川原館跡(34)、芝山遺跡(35)、南稲八妻城跡(36)、八ヶ坪遺跡(37)、瓦谷遺跡(38)、菩提1・2号墳(39・40)、上人ヶ平遺跡(41)の10か所の調査を実施した。33・34・36は京奈バイパス、38～41は木津団地建設に伴う調査である。

木津川河床遺跡では、今回、この遺跡としては初めて、弥生時代後期に属する住居跡7基がみつかった。これまでに古墳時代の住居跡が多数みつまっているが、この発見で遺跡の立地する自然堤防上での集落の変遷をより具体的にたどることができるようになった。このほかに平安時代の墓塚とみられる土坑群が多数、中世の掘立柱建物跡、素掘り溝などを確認した。また、地震による大規模な噴砂を良好な状態で検出するなど地質学的にも一定の成果をおさめた。^(注26)

芝山遺跡は前年度からの継続事業である。この遺跡からは、古墳やそれに伴う各種の施設、飛鳥から奈良時代の建物跡が多数みつまっている。昭和61年度はこれらの細部を調査するとともに、一部拡張して調査を行った。主な成果としては、拡張区で確認した奈良時代の井戸を挙げることができる。この井戸は、横板を隅柱で止める型式のものである。中には須恵器や土師器・土馬・石製の磚・斎串のほか、平城官式の軒丸瓦(複弁八葉蓮華文)^(注27)など多量の遺物が含まれていた。

京奈バイパス関係遺跡では、遺構が前代にすでに削平されて壊れていたり分布が稀薄であったりして、まとまった遺構はあまり検出できていない。久保田遺跡から出土した中世の墨書荷札が注意される。^(注28)

木津団地建設関係遺跡では瓦谷遺跡・上人ヶ平遺跡で遺構を顕著に確認している。瓦谷遺跡では、7か所でトレンチ調査を行った。一辺7mの方形墳、土器や埴輪を棺として使用した小規模な土塚墓を多数確認している。さらに、この古墳の営まれている丘陵の南の谷部では流路の中から古墳時代前期の土器、木棺の小口部分の未製品と思われるものや農耕具の未製品などがみつかった。^(注29)上人ヶ平遺跡では、竪穴式住居跡や土塚を検出した。遺構は古墳時代前期のものが多い。土塚のなかには、弥生時代後期のものもある。また、周辺では埴輪や奈良時代の布目瓦などの散布がみられ、包含層出土遺物の中にも重要なものが多い。これらの遺跡は、今後、本格的な調査が予定されている。成果が期待される^(注30)ところである。

以上、昭和61年度に当調査研究センターが実施した発掘調査の成果の概要をごくかいつまんで紹介した。紙幅の関係もあり、すべての遺跡について説明を充分にするには至らなかった。詳細は注に掲げた文献及び資料のほか概要報告書等を御覧いただき^(注31)たい。また、市町村教育委員会をはじめ府下の関係機関の調査についてもあわせて紹介すべきであったが及ばなかった。この点については、注1文献で府下の調査全体を見渡してまとめを行っているので、参考にされたい。

なお、末尾に当調査研究センターが調査を行った遺跡の現地説明会及び中間報告資料一覧を付した。

(たしろ・ひろし=当センター調査第1課企画係調査員)

- 注1 金村允人・長谷川達「昭和61年度における埋蔵文化財の調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1986)』京都府教育委員会) 1986
- 注2 杉原和雄「昭和61年度 発掘調査予定の遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』(以下、『埋. 文. 情報』と略す)第20号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.6
- 注3 肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区)」(『埋. 文. 情報』第22号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.12
- 注4 菅谷文則『景初4年鏡』私見(『明日香風』21号(財)飛鳥保存財団)1987
- 注5 近藤義行「芝ヶ原古墳」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第16集 城陽市教育委員会)1987.3
- 注6 現地説明会資料 No. 87-05「高山古墳群・高山遺跡」1987.5.20
- 注7 注6と同じ
- 注8 ①三好博喜「一昭和61年度発掘調査略報—12. 西小田古墳群」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3

- ②三好博喜「西小田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注9 ①三好博喜「ゲンギョウの山古墳群の発掘調査」(『埋. 文. 情報』第22号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.12
②増田孝彦・三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注10 ①増田孝彦「一昭和61年度発掘調査略報—4. 宮ノ森古墳群」(『埋. 文. 情報』第21号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.9
②注9②文献と同じ
- 注11 鍋田 勇「峰山町古殿遺跡の第3次調査」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注12 ①竹原一彦「一昭和61年度発掘調査略報—1. 正垣遺跡」(『埋. 文. 情報』第21号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.9
②竹原一彦・藤原敏見「府宮ほ場整備関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.3
- 注13 注12②文献と同じ
- 注14 ①注3文献と同じ
②三好博喜・肥後弘幸「舞鶴市志高遺跡第7次の発掘調査(A・B地区下層)」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987.3
- 注15 ①藤原敏見「一昭和61年度発掘調査略報—13. 平山東城館跡」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
②小山雅人・藤原敏見「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注16 注15②文献と同じ
本号にも関連記事を掲載している
- 注17 引原茂治「栗ヶ丘古墳群の発掘調査」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
引原茂治「栗ヶ丘古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.3
- 注18 本号に略報掲載
- 注19 伊野近富・西岸秀文「西町遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.3
- 注20 森下 衛「千代川遺跡第12次の発掘調査」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注21 本号に略報掲載
- 注22 ①竹原一彦「一昭和61年度発掘調査略報—15. 尊勝寺跡」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
②竹原一彦「尊勝寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注23 ①石尾政信「一昭和61年度発掘調査略報—11. 長岡京跡右京第240次」(『埋. 文. 情報』第22号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.12
②石尾政信「長岡京跡右京第240次発掘調査概要(7ANOTO地区)」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3

- 注24 本号に略報掲載
- 注25 辻本和美「長岡京跡左京第151次」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注26 ①岩松 保「一昭和61年度発掘調査略報—19. 木津川河床遺跡」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1987.3
 ②松井忠春・岩松 保「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注27 ①小池 寛「芝山遺跡の発掘調査」(『埋. 文. 情報』第20号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986.6
 ②小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注28 ①黒坪一樹「一昭和61年度発掘調査略報—久保田遺跡—」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
 ②黒坪一樹「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注29 ①戸原和人・伊賀高弘「瓦谷遺跡の発掘調査(瓦谷20番地地区)」(『埋. 文. 情報』第23号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3
- 注30 本号に略報掲載
- 注31 昭和61年度の調査成果は、『埋. 文. 情報』第21・22・23・24号、『京都府遺跡調査概報』第22・23・24・25冊に略報と概要を掲載している。本稿では名称だけを挙げ、説明していない調査例があるが、これらの刊行物を参照されたい。

現地説明会資料

Na86—05	宮の森古墳群	1986. 7. 12	
Na86—08	ゲンギョウの山古墳群	1986. 9. 6	
Na86—03	桃山古墳群	1986. 5. 24	
Na86—11	古殿遺跡	1986. 11. 8	
Na86—04	正垣遺跡	1986. 6. 12	
Na86—09	志高遺跡	1986. 10. 11	
Na86—07	綾中遺跡	1986. 9. 5	
Na86—10	栗ヶ丘古墳群	1986. 10. 11	
Na87—03	青野遺跡	1987. 3. 12	
Na86—13	尊勝寺跡	1986. 11. 22	
Na87—02	平安京跡	1987. 3. 7	
Na86—06	芝山遺跡	1986. 7. 26	
Na86—12	瓦谷遺跡 一住宅・都市整備公団開発事業に伴う調査一	1986. 11. 22	
Na87—01	上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡 一住宅・都市整備公団開発事業に伴う調査一	1987. 2. 21	

中間報告資料

Na87—01	西小田古墳群	1987. 1. 14	竹野郡丹後町・弥栄町
Na87—06	志高遺跡(2)	1987. 3. 13	舞鶴市
Na86—12	千代川遺跡第12次	1986. 12. 2	亀岡市

No.87-15	栗ヶ丘古墳群(2)	1987. 3. 12	綾部市
No.86-09	木津川河床遺跡	1986. 8. 28	八幡市
No.86-13	八ヶ坪遺跡	1986.12. 4	木津町
No.87-02	久保田遺跡	1986. 2. 2	田辺町
No.87-04	木津川河床遺跡	1987. 2. 10	八幡市
No.86-06	長岡宮跡第172次	一向日町警察署庁舎新築工事に伴う発掘調査—	
		1986. 6. 13	向日市
No.86-07	長岡京跡左京第151次	一名神高速道路羽束師川橋架替工事に伴う発掘調査—	
		1986. 7. 24	向日市
No.86-08	長岡京跡左京第151次(2)	一名神高速道路羽束師川橋架替工事に伴う発掘調査—	
		1986. 8. 20	向日市
No.86-10	長岡京跡右京第240次	一向日ヶ丘養護学校管理棟建設工事に伴う発掘調査—	
		1986.11. 4	長岡京市
No.86-11	長岡京跡左京第160次	一府道伏見・向日線交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査—	
		1986.11.25	向日市
No.87-03	長岡京跡右京第251次	一府道長法寺・向日線改良工事に伴う発掘調査—	
		1987. 2. 9	長岡京市
No.87-07	長岡京跡右京第255次	一府道長法寺向日線改良工事に伴う発掘調査—	
		1987. 3. 17	長岡京市

野崎遺跡の削平された古墳群

小 山 雅 人

1 はじめに

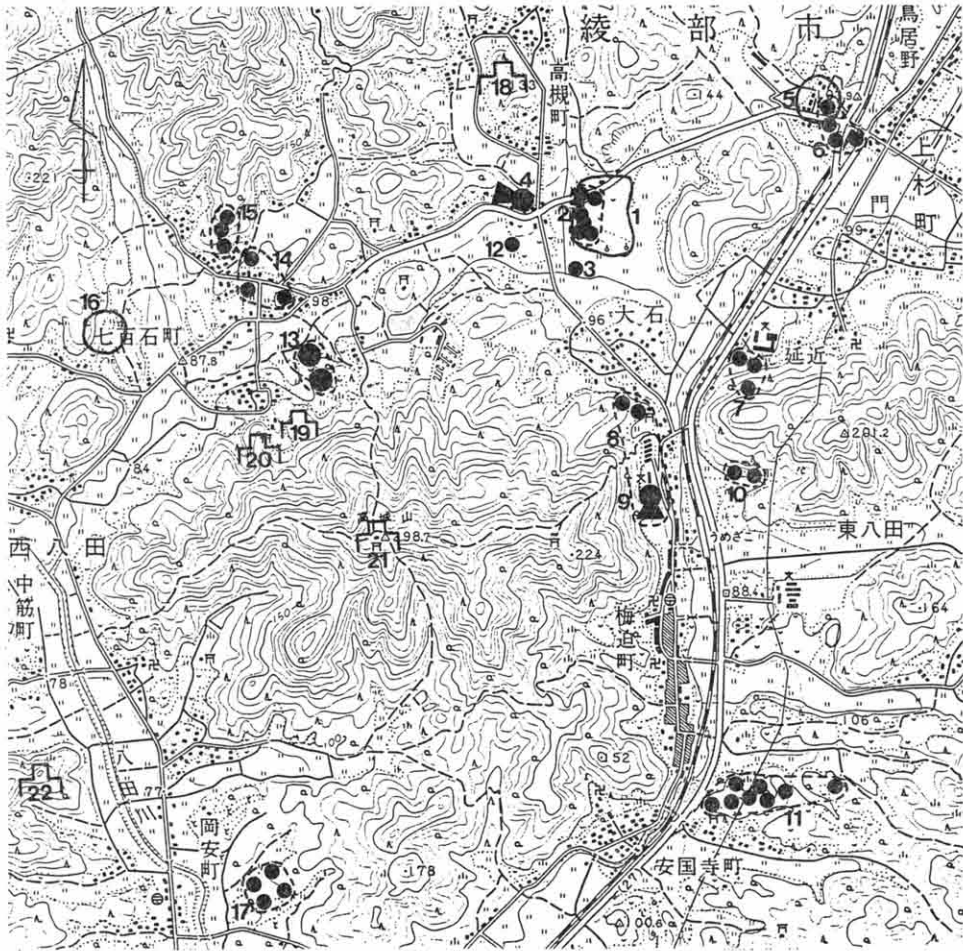
綾部市高槻町に所在する野崎^{のさき}遺跡は、市内でも数少ない旧石器の散布地である上杉町旗^{はた}投^{なげ}遺跡^(注1)から西方800mにあり、チャートの石鏃や剥片10数点や、須恵器・土師器片が採集されていることから、縄文時代以来の遺跡として知られていた。北からのびる丘陵の先端^(注2)の低平な畑地(南北250m・東西180m)が遺跡であり、周囲の水田との比高差は5m前後にすぎない。今回、近畿自動車道舞鶴線の建設予定路線にこの遺跡の西端部にあたる幅32m・延長175mが入り、工事に先立って、当調査研究センターが発掘調査を実施した。その結果、縄文時代から中・近世とされてきた遺跡としての遺物の散布は薄かったが、6基の周濠をもつ古墳跡が検出され、これに伴う埴輪や土器も少なからず出土した。

本稿は、前方後円墳1基・円墳5基からなるこの「野崎古墳群」の発掘調査の概要を報告するものである。なお、出土遺物については現在一通りの整理を終えつつある段階であり、次号で報告する。

2 野崎古墳群の環境

高槻町は、旧何鹿郡東八田村に属し、東八田・西八田を合わせた古代の八田郷の北部に位置する。この八田地区は、考古学的には、由良川の支流である八田川の上流域と呼ばれることが多い。

上述した旧石器・縄文時代の旗投・野崎の両遺跡(第1図, 5・1)の後、弥生時代の散布地は現在のところ報告されていないが、古墳時代の中期になると、七百石町の政次古墳群(同, 13)が築かれる。1号墳は、直径40mの円墳で、すでに調査が行われている。その東方の高槻町の茶臼山古墳(同, 4)は、体積こそ丹波最大の方墳聖塚古墳の13,000m³にははるかに及ばない(3,687m³)ものの、全長54mの大きさは、由良川流域では最大である。時期は後円部頂から出土した須恵器から、5世紀後半から末頃と言われている。また、古墳時代後期になると、人物埴輪が出土した全長約50mの上杉1号墳(同, 9)が築造されている。これら、中丹地方では最大規模の首長系列墳とも見られる古墳の存在は、平野部の狭小さや比較的散在的な小型古墳の分布状況から見ると、古墳時代のこの地域はやや特異な様相を呈



第1図 野崎遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000; 古墳は約1/10,000)

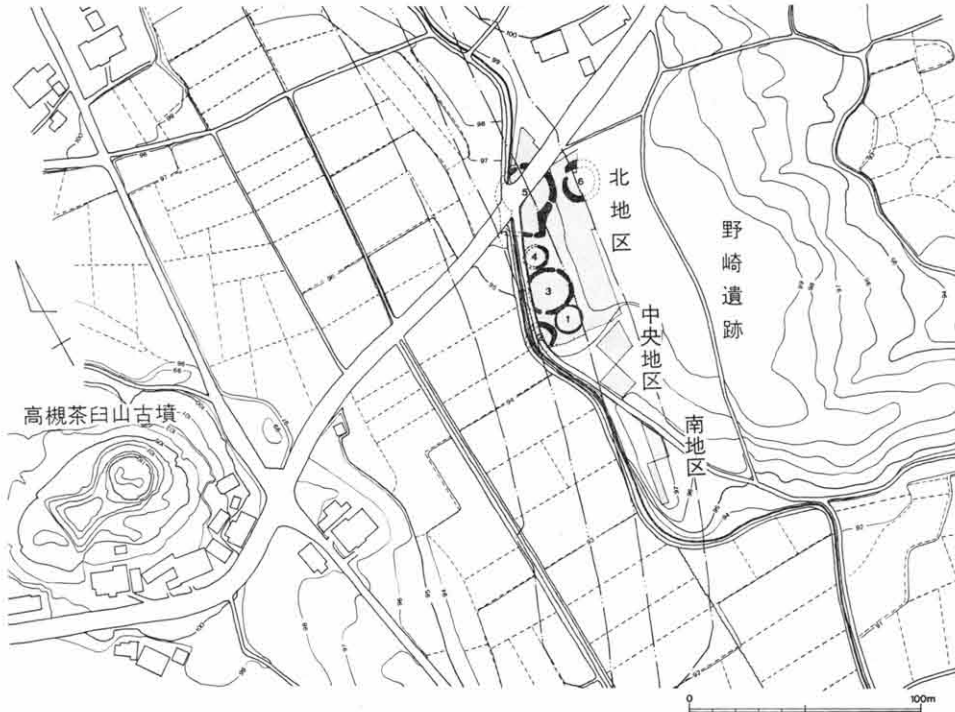
1. 野崎遺跡 2. 野崎古墳群 3. 狐塚古墳 4. 高槻茶臼山古墳 5. 旗投遺跡
6. 焼森古墳群 7. 中島古墳群 8. 上杉古墳群 9. 上杉1号墳 10. 石子古墳群
11. 宮ノ腰古墳群 12. 白田古墳 13. 政次古墳群 14. 塚廻り古墳群 15. 八幡宮古墳群
16. 七百石遺跡 17. 杉ヶ本古墳群 18. 高槻城跡 19. 平山東城館跡
20. 平山城館跡 21. 高城城跡 22. 姫城跡

している。

奈良時代の遺跡としては、野崎遺跡やその西方400mの大原遺跡で土器片が採集されているが、発掘調査例がなく、実態は不明である。^(注4)

平安時代から室町時代にかけての八田郷は、考古学的には非常に資料が少ないが、高槻町の篠神社(同、18の北)境内本殿裏に経塚があり、湊垣町(第1図範囲のやや南西)の木寺北遺跡からは、例の少ない鉄磐(12世紀)が出土している。また、上杉町は中世の上杉庄であり、その南の安国寺町は、足利尊氏ゆかりの寺から町名をとったものである。^(注5)

中世末期には、八田地区でも多くの山城が営まれたが(現在11か所)、昨年度にこの同じ



第2図 野崎古墳群と高槻茶白山古墳

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡として調査した山城として、七百石町の平山城館跡(同, 20)と平山東城館跡(同, 19)があり、その成果は、本誌でも紹介したところである。^(注6)

3 調査の経過

発掘調査は、昭和61年11月28日に開始したが、1月から3月上旬にかけての数回に及ぶ積雪と3月後半の天候不順によって、作業が遅延し終了したのは3月24日であった。このため、現地説明会も62年度に入って5月8日に実施した。なお、実働日数は51日である。

調査地は、3地区に分け、北地区・中央地区・南地区と命名した(第2図)。

北地区の2,000m²については、4m方眼のグリッド網を設定し、まず最高所である東部に幅4m・長さ68mのトレンチを入れた。次いで、西半部には東西方向に3本のトレンチを入れ、精査したところ、溝状の遺構を検出し、これらが円弧を描くように見え、溝によっては埴輪片を含んでいたため、北地区を全面発掘に切り替えた。北地区の最終掘削面積は、1,928m²である。

北地区では、厚さ20~30cmの耕作土(畑)のすぐ下に、橙褐色粘質土~淡黄色粘土の地山が広がっている。遺構は、この地山を掘り込んでおり、褐色ないし暗茶褐色の粘質土で埋

まっている。検出した遺構は、幅1~3m・深さ5~50cmの溝6条と、他に土坎・ピットがあった。6条の溝は、後世の削平や攪乱を受けていない限り、完結した円、あるいは内側に前方後円形部を掘り残した様相を呈し、また溝の埋土からは、古墳時代の中・後期の須恵器・土師器、それに埴輪片が出土したので、これらの溝を古墳の周濠ないし周溝と判断した。そして、墳丘部分については、後世の削平によって完全に失われたものと考えた(第4図)。古墳の名称については、小字名「野崎」を採り、尾根の先端部(南)から「野崎1~6号墳」と命名した。次項以下では、この名称で報告する。

中央地区は、現況では南北両地区とは2m程低くなった谷状の地形を呈している。畑の耕土を30cmばかり除去すると、厚さ20~50cmの包含層がほぼ全面に広がっている。近世以降の陶磁器の細片が出土したが、瓦器碗片や中国製青磁片などの中世遺物も含まれている。その下層には黒墨層があり、漸進的に赤褐色粘質土へと続くが、この2層からの遺物は皆無であった。中央地区の掘削面積は、268m²である。

南地区は、再び低い丘陵状を呈するが、176m²のトレンチを入れた結果、何の遺構も遺物も検出されなかった。

今回の調査では、3地区合わせて2,372m²を掘削調査したが、縄文時代から中世に至る散布地としての野崎遺跡の遺構は検出されず、遺物も石器剥片数点にとどまった。ところが、予想もしなかった古墳跡を6基検出し、周濠等からかなりの量の遺物が出土したので、これを「野崎古墳群」と命名し、野崎遺跡と複合していると判断した訳である。

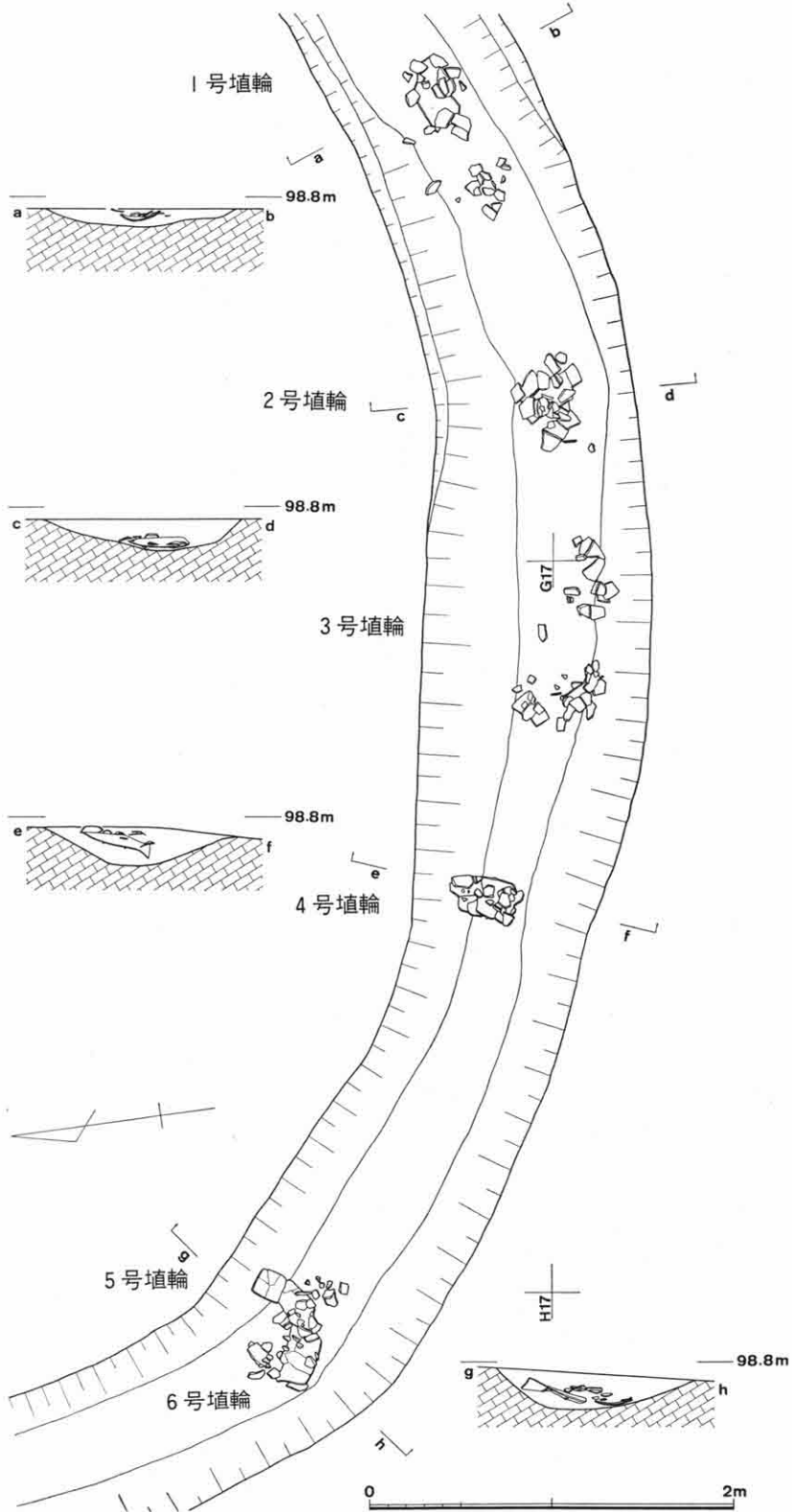
この野崎平と呼ばれる台地は、現在かなり低平になっているが、古墳の検出状況や中央地区のような谷状地形の遺存から、本来は、かなり起伏があったものと考えられる。

4 各古墳の概要

以下、各古墳の調査結果を報告するが、直径・全長・周濠幅等の数値については、いずれも検出面(地山面)での周濠の平面形に基づくものである。

野崎1号墳

周濠の全周が検出された唯一の古墳である。円墳で、東西・南北とも直径は10mである。周濠の幅は0.5~1.5mで、深さは5~33cmを測り、東側で狭く浅く、西側が広く深い。尾根の稜線が東方にあることから、旧地表面が西に傾斜していた関係で、このように古墳の基底面も西に傾斜していたと考えられる。このような観察は3号墳でも可能である。周濠の北東と南東には、内外両側から突出して向い合う半陸橋状(あるいは馬の背状の陸橋)の掘り残し部分がある。



第3図 野崎1号墳輪出土状況実測図

東側を除く周濠の中には埴輪片が散乱しているが、南側では、約7mの間の5か所にはほぼ完形ないし半完形の円筒埴輪が6個体落ち込んでいた。埴輪の多くは周濠と直交する方向に倒れており(第3図)、埴輪に立っていた埴輪がそのまま倒れたものと推察される。他の遺物として、周濠北側で出土した須恵器の小型短頸壺がある。

野崎2号墳

西半部と南側が大きく削平されている古墳で、1号墳の西に接する。周濠の一部が残っていただけであり、復原は難しいが、直径9m前後の円墳であろう。周辺の土層から見て、この古墳を削平し、整地した上に1号墳が築かれた可能性が高い。周濠からは、少量の土師器・須恵器片とともに埴輪片が出土している。整理箱に1箱程度の量であるが、1号墳の埴輪とは、胎土・焼成とも異なっており、この2号墳も埴輪を持つ古墳と考えられる。すべて小片であるので、復原はほとんど不可能であるが、4号墳のそれと似た家形埴輪と思われる。

野崎3号墳

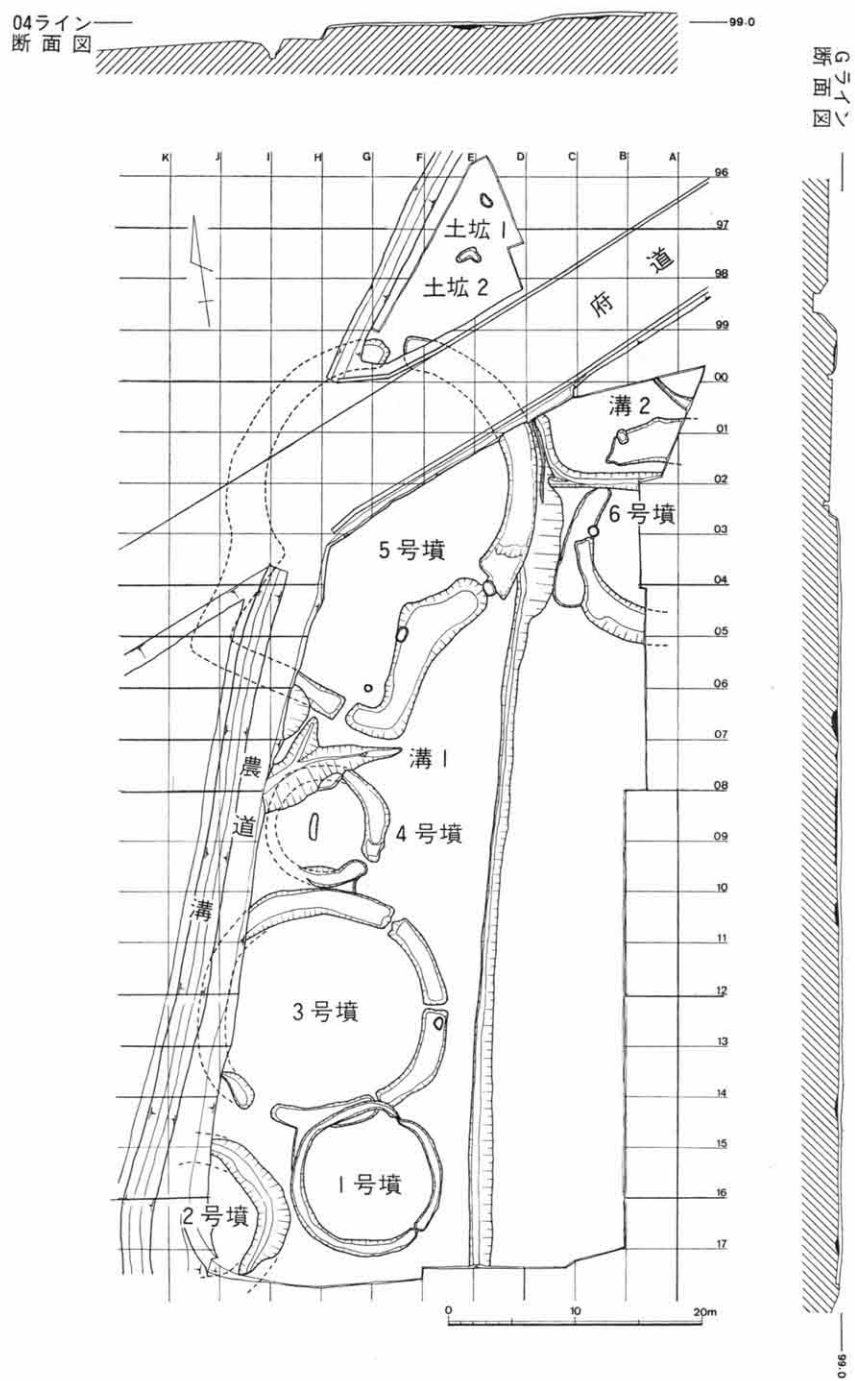
西側の一部を農道によって削られており、南側の周濠の一部も1号墳のそれに切られている。直径は、南北14.8m・東西15.8mを測り、この古墳群の円墳としては最大である。周濠は、幅1.5~2.0m・深さ10~26cmを測るが、北西側では検出面から50cmを超える。周濠の北東・東・南東に半陸橋状の掘り残し部分があり、南西には幅の広い陸橋状遺構がある。周濠からは、特に北東の半陸橋の両側から、須恵器・土師器(特に高杯が多い)とともに、「土製模造品」と呼ばれる馬・犬(?)・鏡・鉢の4点の土製品が出土した。周濠内からは少量の埴輪片も出土したが、北側のは4号墳、南側のは1号墳からの混入であろう。

野崎4号墳

3号墳の北に接する小型の円墳である。西側が攪乱を受けており、北側も溝1によって削られているので、復原は難しいが、直径7.5m前後であろう。周濠は浅く、しかも近年の耕作時に攪乱を受けているが、南東部に半陸橋状の掘り残し部分がある。

埴輪部中央に、南北に軸を持つ主体部の底がかろうじて残っていた。残存長2.1m・幅0.6mで、検出面からの深さは3~4cmに過ぎない。この墓壇の中央やや南寄りに、鉄鍬3点があったが、他に遺物は出土しなかった。

4号墳の北を東西に楔形に切り込む溝1は、上層に黄色混り黒色土、中層に暗褐色土・下層に暗茶褐色土のそれぞれ粘質土が埋まっていた。4号墳は、埴輪を削平されてはいるが、中央部から西半分にかけては(中央地区に見られた)黒墨層があり、主体部もこれに掘り込まれている。溝1の性格は全く不明であるが、上層の黄色混り黒色土は、この4号墳の盛土であった可能性が高い。^(注7)溝1の中層からは、須恵器片と埴輪片が、まとまりなく出



第4図 野崎古墳群実測図

土したが、接合作業の結果、須恵器短頸壺1点と寄棟式家形埴輪1点がそれぞれ完形近くまで復原でき、他の遺物はほとんど混っていなかった。後者には、3号墳北側周濠から出土した数点の埴輪小片も接合しており、上述した溝1上層の様相も考え合わせると、これら溝1の出土遺物は、本来4号墳に伴うものであったらしい。

野崎5号墳

調査地の最北に位置する前方後円墳である。前方部西半部を2号墳・3号墳と同様に農道によって削られ、後円部も大半が現在の府道によって失われているが、府道の北で、後円部北側の周濠の一部が検出され、全長26m・後円部直径19m・前方部幅13m・くびれ部幅10mと復原できる。前方部の長さが8.4mとやや短いのが特徴的である。周濠は幅2～3m(くびれ部では4.5m)を測る。深さは36～55cmを測るが、府道の北に位置する後円部北側では20cm程度しか残っていなかった。周濠が全周していたものとするれば、半分弱しか検出できなかった訳であるが、後円部の北と南東、前方部前縁東寄りの3か所に陸橋状の掘り残し部分がある。この前方後円墳の軸方向は、国土座標に対してN-32°-Eの傾きをもっている。なお、葺石の痕跡は認められない。

周濠からの出土遺物は、細片が多いが、後円部東側では甕・高杯等の土師器片、後円部南側からくびれ部にかけては高杯を主とする須恵器片が目立った。埴輪をもたない古墳であるらしく、破片1点すら出土していない。

野崎6号墳

5号墳の東に位置する古墳で、東半部が調査地外にある。円墳として復原すれば、直径は約12mである。周濠は、幅3m前後で深さ20～35cmを測る。後世の字切溝によって切られているが、北西側に陸橋部がある。周濠からの出土遺物は少ないが、須恵器短脚高杯片等がある。

5 野崎古墳群の特徴

以上、本稿では野崎古墳群の遺構を中心にその概要を報告したが、総括は次回の遺物の整理報告と合わせて行うこととし、今回は専ら遺構に関してその特徴と問題点をまとめておきたい。

(1)野崎古墳群は、地形や古墳の配置から見て、おそらく6基からなる古墳と思われる。各古墳の築造順序に関して、遺構の検出状況からは次のことが言える。

周濠の切り合い関係を見ると、4号墳→3号墳→1号墳と、2号墳→1号墳の新古関係が得られる。また、1号墳は、その築造にあたって3号墳の周濠をかなり冒し、同時に2号墳の墳丘盛土を削平して、南西部の整地をした様子が認められる。これに反して、2～6

号墳の5基は、相当密集したこの古墳群においても、周濠のごく一部の切り合いは認められるものの、先行する古墳を充分意識しているらしい。しかしながら、後述するように、この古墳群には周濠に共通した特徴をもっており、1号墳が異質であるとは言えない。

時期を限定できる遺物は少ないが、5号墳周濠出土の須恵器は3号墳周濠出土のそれよりも1～2型式古いように思われる。現段階では、5世紀末頃から6世紀中頃までに6基の古墳が築造されたものと見ておきたい。

(2) 野崎の古墳は、いずれも周濠(周溝)を設けている。検出状況から言えば、周濠があったからこそ、完全な削平からはまぬがれたわけである。また、2号墳を除いたすべての古墳で、陸橋状の掘り残し部分を有するという共通したクセのあることも興味深い。この陸橋状遺構は、①3号墳南西部・5号墳前方部の例のように、少なくとも検出面では平坦で、文字通り橋の如き様相を呈するもの、②3号墳北東部及び東部・5号墳後円部南東部の例のように陸橋の中程がやや低くなった馬の背状のもの、そして③1号墳南東部及び北東部の例のように、陸橋の中程が周濠の底のレベルまで低くなっており、陸橋というよりも周濠の内外両側からの対になった突出部という形態を示すものの3種類がある。この陸橋状遺構の性格については不明とせざるを得ないが、解明の一助になるかも知れない事実をいくつか挙げるにとどめる。

1号墳では、周濠内に埴輪が散乱していたが、北東と南東の半陸橋部の間(全周の約3分の1)の部分では、埴輪片は全く出土しなかった。また、3号墳の周濠からは土製模造品が数点出土したが、いずれも北東の陸橋状遺構の両側に集中していた。一方、この古墳群は東が高く西が低い斜面に営まれているが、陸橋状遺構を境に周濠底のレベルが特に異なるということとはなかった。

(3) 中丹地方で埴輪を出土する古墳は比較的少ない(これまで16基)のであるが、野崎古墳群では1号墳で円筒埴輪、4号墳と2号墳では上述したような状況で家形埴輪(のみ)を伴っていた。当古墳群では規模の小さい3基が埴輪を持っていたわけである。

中丹地方の埴輪は、現状では中期前半の菖蒲塚・聖塚、中期後半の妙見1号墳の3大方墳と中期後半の八ヶ谷古墳・中坂1～3号墳の中小方墳や前方後円墳の沢3号墳、後期の上杉1号墳・以久田野78号墳・稲葉山10号墳等の前方後円墳に伴っているが、円墳に伴う例としては以久田野17・20・82号墳、及び田坂野7(か8)号墳が知られていたに過ぎない。綾部市内に限って言えば、比較的まとまって出土した埴輪資料としては、菖蒲塚・聖塚がある程度で、時期こそ異なるが、野崎1号墳の資料は上述した出土状態からしても、良好な保存状態からしても、北丹波の埴輪の研究上、貴重な資料と言えよう。また、4号墳の家形埴輪は、綾部市内では初めての出土例である。^(注8)

(4) 野崎5号墳は前方後円墳である。中丹地方では現在までに(最近話題になった福知山市の広峯15号墳を含め)30基(帆立貝式を2基含む)の前方後円墳が確認されていたが、これに1基追加することとなった。26mという全長は、最小の部類に属する(他に上村7号墳の23.5m等がある)。東八田地区では3基目となり、時期的には茶臼山古墳と上杉1号墳の間に入ると思われる。

(こやま・まさと=当センター調査第2課第3係長)

注1 『綾部市史』上巻, 34・564頁。

注2 中村孝行「塚廻り古墳群」(『綾部市文化財調査報告』第7集, 綾部市教育委員会) 1980, 3頁。

注3 長谷川達「政次1号墳発掘調査概要」(『綾部市文化財調査報告』第8集, 綾部市教育委員会)1981。

注4 注2文献, 3頁。

注5 中村孝行「木寺北遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第12集, 綾部市教育委員会)1985。

注6 藤原敏晃「13. 平山東城館跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.3, 57~58頁。

藤原敏晃「20. 平山城館跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第24号, (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987.6, 27~28頁。

注7 当調査研究センターの引原茂治主任調査員によると、調査中の綾部市小呂町の栗ヶ丘古墳群でも墳丘盛土は同様の土層であるとの由である。

注8 綾部市教育委員会の中村孝行氏には、市内の古墳の諸データに関しても多大な御教示をいただいた。

昭和61年度発掘調査略報

20. 平山城館跡

所在地 綾部市七百石町
 調査期間 昭和61年11月17日～昭和62年3月20日
 調査面積 約1,500m²

はじめに この調査は、近畿自動車道舞鶴線第8次工事区間建設に伴う事前の発掘調査である。この城館は調査開始当初は平山谷城館と称していたが、『日本城郭大系』^(注1)11では平山城、『綾部市文化財調査報告』^(注2)第7集では、中城と報告されており、混乱を避けるためにも平山城館跡として報告する。先の綾部市の報告ではこの城館跡は、「平山の中城は規模が大きく、3～4段に郭が築かれ一部には豎堀が設けられている。」^(注3)とあり、『日本城郭大系』^(注4)11では「高城城跡の支城」とある。高城城跡とはこの八田地域の最高所にあり、城郭大系に「綾部市内の城の城主には大槻姓が多く、大槻氏の一円支配の本貫地である」とある中心的な城跡と考えられている。この高城城跡の北側に張りだす尾根上に位置する。

調査概要 この城跡は綾部市の報告にあるように3段の郭からなりつつ。しかし、調査の結果、郭といえるものは下2段であり、最も高い平坦部は郭と考えないものとした。これは、下2段は遺構面が検出されたのに対し最高所は盛土であり、遺構面が確認されなかったことによる。また、最高所を土塁的なものと考えれば、背後に堀切り(空堀)と土塁を



調査地位置図(1/50,000)

有するという構造が東隣の平山東城館跡と同じパターンになることによる。地形測量図によると、下の郭は南北約70m、東西は北側で約20m、南側で約35mを測る。2段目は南北約10mを測り、東西約40mを測る。土塁としたものの背後は尾根を切断する形で堀切りがある。この深さは約12m、郭との比高差も約12mである。

検出した遺構の主なもの、下の郭で検出した建物跡である。上の郭については、精査継続中であり、今後建物跡等が検出さ

れるものと考えられる。建物跡は、南側に東西5間×南北4間の礎石を主とするものと、この建物の北側に並んで2棟ある。西側のものは東西1間×南北4間、東側のものは東西4間×南北4間の規模である。出土遺物は、陶器・磁器・土師器・金属製品・石製品と豊富である。丹波系・備前系・越前系の甕をはじめとして青磁・白磁・染め付け等の輸入陶磁器類、美濃・瀬戸系のものなど多種多様である。

まとめ この城館は、2つの郭を有するもので、背後に敵の襲来を遮断する大きな土塁的な施設と堀切りを持つものである。郭には建物が3棟以上あり、出土遺物も豊富である。^(注5)これは、当地が相当の実力者の城館であることを示していると考えられる。しかも、これまでこの地域の中心的な山城といわれていた高城城跡が大きな郭の存在が未確認であること^(注6)を考えると、平山城館、平山東城館、高城城跡等の一群をまとまりのものとして捉えていかなければならないと考えられる。

今回の調査は、山城を広範囲にしかも東隣の平山東城館跡と同時に発掘調査したことになる。したがって、今後、整理検討を進める中で山城の解明に大きく貢献するものと考えられる。現在この調査は継続中であり、今後調査が進行する中で更に大きな成果が積み重なるであろう。

(藤原敏晃)

注1 『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980

注2 「上林城跡・塚廻り古墳群」(『綾部市文化財調査報告』第7集、綾部市教育委員会)

注3 注2に同じ

注4 注1に同じ

注5 現在調査継続中であり、特に上の郭は本格的な精査に至っていないが、礎石と考えられる平な石や石敷が見つかった。

注6 注1に同じ

21. 青野遺跡 第11次

所在地 綾部市吉美前
 調査期間 昭和61年12月3日～昭和62年3月20日
 調査面積 約700m²

はじめに 青野遺跡は、綾部市街地北方の由良川自然堤防上に立地し、弥生時代から中世にわたる大規模な複合集落遺跡である。青野遺跡の調査は、昭和47年に関西電力青野変電所の建設に伴う青野A地点調査(第1次)により始まる。この調査では、弥生時代後期と古墳時代前期・後期の三時期に大別される住居跡16基、溝・土壇等を多数検出した。中でも「青野型」と呼ばれる特異な平面形態をもつ住居跡は注目された。以降、白瀬橋橋梁改良工事・由良川左岸改修工事等に伴い10次にわたって調査が実施され、多大なる成果を挙げるとともに、その範囲も、東西400m・南北300mに及ぶことが判明されつつある。

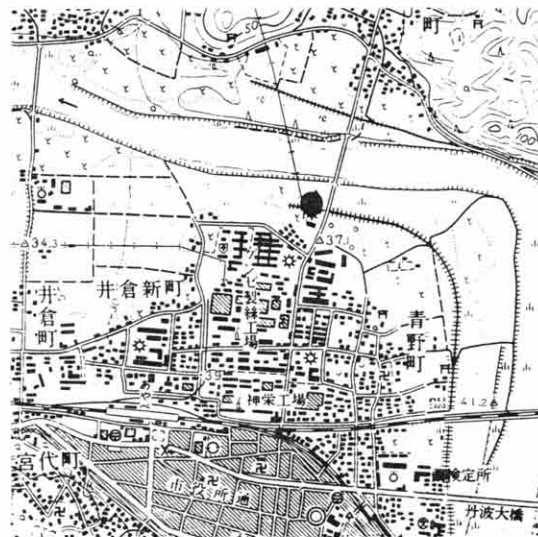
今回の調査は、京都府土地改良事務所の計画による農道整備事業に伴うもので、青野A地点・青野9次調査に隣接し、多くの遺構・遺物の存在が予想された。

調査概要 調査の結果、調査面積700m²たらずの狭小な範囲に、竪穴式住居跡・土壇・溝等の遺構が複雑に切り合っって検出され、また石器・弥生式土器・須恵器・土師器・瓦器など多数の遺物が出土した。

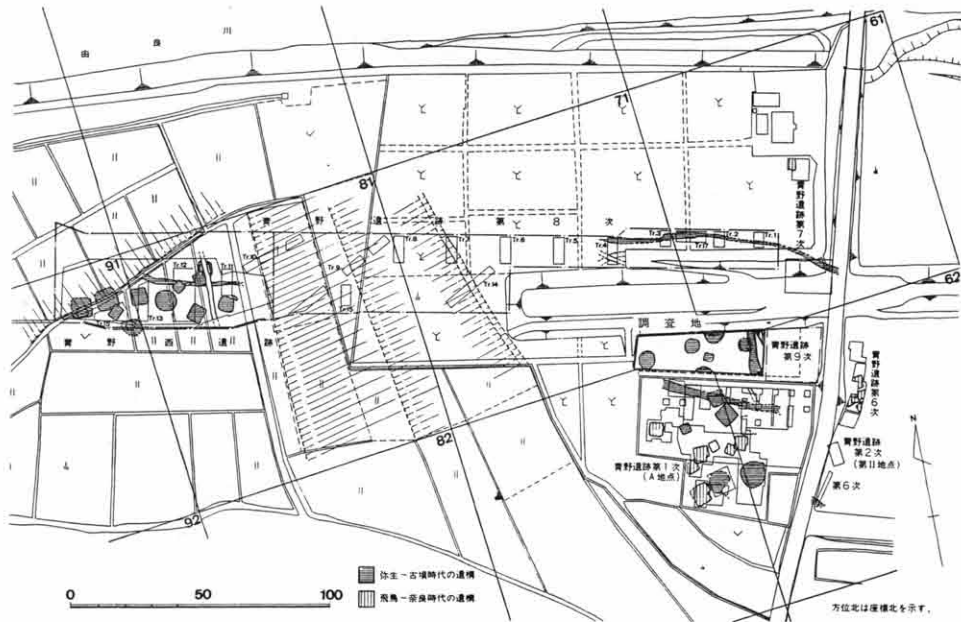
竪穴式住居跡は、直径6m前後の円形住居5基、一辺5m前後の方形住居5基であり、切り合い関係から円形住居が先行する。弥生時代後期・古墳時代前期の住居跡である。

土壇は、長方形・円形・楕円形などさまざまな形態を呈し、16基検出した。埋土内から炭化物・焼土を含むものがあり、墓と推察される。出土遺物から弥生時代中期後半(Ⅳ様式)に属するものと考えられる。

溝は、計11条検出し、断面U字形をなす。いずれも方向性はみられず、



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 調査地周辺平面図

切り合って検出している。時期は、古墳時代前期から後期にかけてのものと考えられる。

まとめ 今回の調査は、広範囲な青野遺跡の一区画にすぎないが、検出遺構から概ね土地利用の时期的な変遷が窺えた。以下、調査で得た知見を列記したい。

(1) 弥生時代の中期から後期にかけて、調査地は墓域から住居域への変遷があったと推測される。

(2) 古墳時代前期に住居は途絶え、以降古墳時代まで盛んに溝が掘られることから、集落の周辺区域であったと考えられる。

(3) 古墳時代後期の遺構は、調査地東端の溝一条に限られ、この溝がその時期の西限を示すものとみられる。

(4) 遺物では、青野A地点調査時と同様、比較的多量の石器が出土した。石剣・石鏃・石斧・タタキ石など種類は様々である。特に土坑内から出土したサヌカイト製の石小刀は、全国的にも東海・畿内などで150点程度しか出土例がなく注目される。

以上、青野遺跡第11次調査の概略を簡単に記したが、この調査は、次年度以降西方に向かって継続して実施する予定であり、青野遺跡の西限や旧河道を挟んだ対岸の青野西遺跡の東・南限等を明確にすることなど、その成果が期待される。

(水谷寿克)

22. 長岡宮跡第 185 次 (7AN20E 地区)

所在地 向日市上植野町馬立
 調査期間 昭和62年1月17日～3月4日
 調査面積 約380m²

はじめに 今回の調査は、向日町郵便局庁舎の増築工事に伴うものである。当地は、長岡宮跡の西南部に位置し、向日丘陵西南端の傾斜変換線を越えた平坦地である。周辺には「島坂」「滝ノ町」等の地名が残り、長岡宮跡に関連する遺構・遺物の存在が期待される場所である。しかし、近年の調査成果から、旧小畑川の河道が向日丘陵真下まで広がっていることが判明し、当地でも河道の厚い砂礫層の堆積が確認されるものと予想された。

調査概要 調査地は、小畑川の谷底平野に位置しており、標高25m前後の「さら地」である。周辺の水田、畑地との比高差は2mと高く、相当な盛土による造成が行われている。盛土以下の堆積層は、耕作土、床土、褐灰色粘質土、砂礫、黄白色粘質土の順である。この砂礫層は、厚さ2mを超え、旧小畑川の埋没過程を示す資料である。

砂礫層は大きく3層に分かれ、上から灰色砂礫、茶褐色砂礫、黄褐色砂礫の順に堆積している。灰色砂礫は厚さ0.1～0.3m、小粒の礫の集合で、礫の長軸が一定しない。茶褐色砂礫は、厚さ0.4～0.6m、小礫から中礫が主成分であり、礫の長軸は、南東方向が多い。黄褐色砂礫は、厚さ1.0～1.2m、中礫が主であるが、粘土、砂層も含まれる。この三者の砂礫層には、いずれも、14世紀後半の土師器や瓦器碗が含まれている。なお、旧河道の河床面は、固くしまった砂粒を含む黄白色粘質土で、砂礫の堆積作用によってできた南北方向の深い溝が認められた。

まとめ 旧小畑川の河道を確認することができた。川の流れは、北から南へでありかなり急流であったと推察される。埋没時期は、土師器皿、瓦器碗等の出土遺物から14世紀後半である。しかし、長岡京期においては、旧小畑川の実態は、今回の調査成果から依然解明できない。

(竹井 治雄)



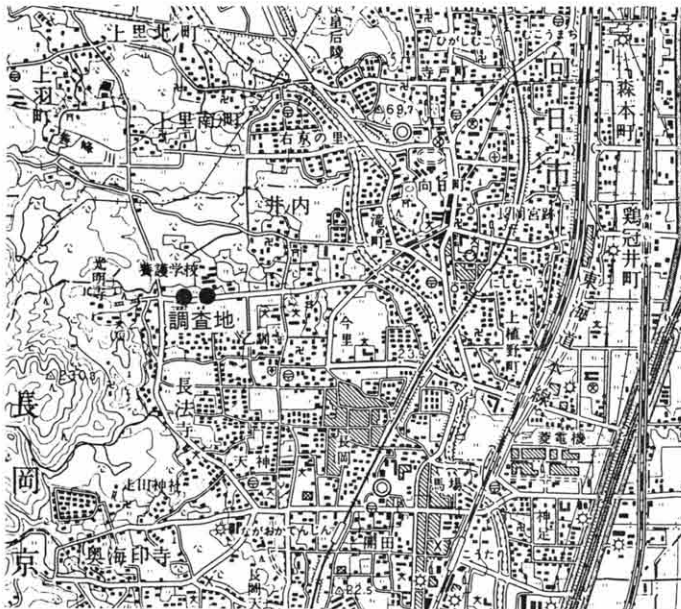
調査地位置図 (1/50,000)

23. 長岡京跡右京第251・255次 (7ANHKB・HKB-2地区)

所在地	長岡京市粟生川久保・畑ヶ田地内	
調査期間	昭和61年12月9日～昭和62年3月19日 (251次 昭61.12.9～昭62.3.14) (255次 昭62.2.6～昭62.3.19)	
調査面積	約610m ² (251次 450m ² , 255次 160m ²)	

はじめに この調査は、府道長法寺向日線の路面拡幅工事に伴う事前調査である。調査対象地は、長岡京の条坊復元によれば、右京第251次は右京二条四坊五町・十二町に相当し四坊坊間小路が通り、右京第255次は同十二町・十三町に相当し四坊第二小路が通る。また、縄文時代から近世にわたる井ノ内遺跡の範囲にも含まれる。当地は、西から東へ緩やかに傾斜する扇状地形の段丘上に位置し、北側を坂川の支流が東方へと流れ、現在は水田となっている。地形図によれば旧坂川との間に1～2mの段差が認められる。

周辺部では、向日ヶ丘養護学校内の3回の調査、特別養護老人ホームの調査(右京第201次)が行われている。養護学校敷地内の右京第44次調査では、奈良時代から近世の遺構および古墳時代から江戸時代の遺物が、右京第240次調査では、長岡京期の大きな井戸(長岡京内で最大級)が検出されている。右京第201次調査では、中世の井戸・溝・土塚が検出され、縄文土器・すり石や石皿・石錘をはじめ、古墳時代後期から中世の遺物が出土してい



第1図 調査地位置図(1/50,000)

る。今回の調査でも長岡京跡や井ノ内遺跡に関連する遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要 第251次調査では全域に平安～中世の柱跡群が検出された。第2トレンチで、柱跡の他に土器だまり、焼土を含んだ不定形の土塚状落ち込み、溝などが検出された。土塚状の落ち込みには6世紀初～中頃の須恵器高

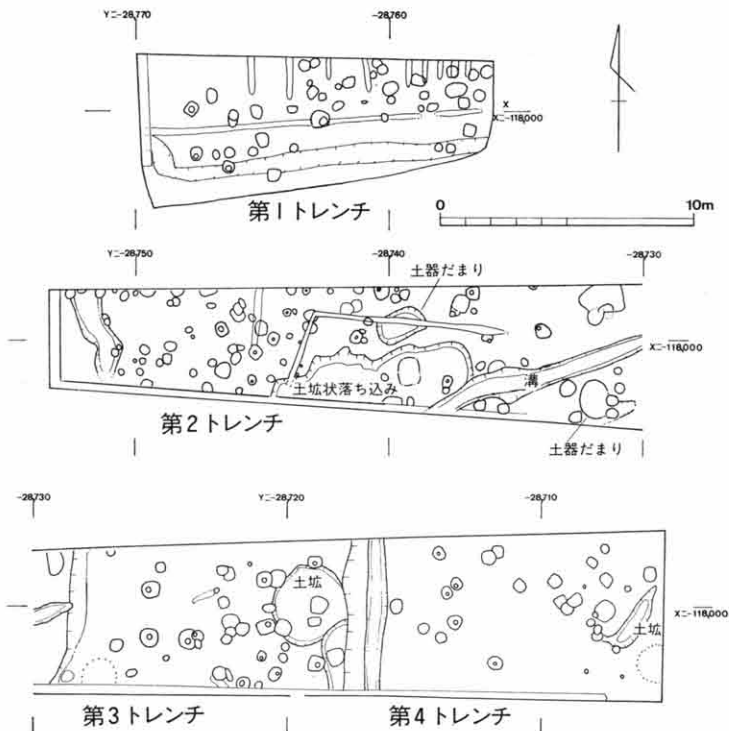
杯・杯蓋・杯身・器台などが出土した。第3トレンチで、柱筋を東西・南北にとるやや大きい柱跡や、径約3m・深さ0.3m前後の円形土塚が検出された。四坊坊間小路の推定される第4トレンチでは、柱跡群と長さ約3m・幅0.7m前後の土塚が検出されたが、その下層の暗褐色土には顕著な遺構はみられず、小路に関連する遺構は検出されなかった。東端の第5トレンチは、南方でのみわずかに柱跡が検出された。出土遺物には、石鏃・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・柱根などがある。第255次調査でも全域で柱跡群が検出された。柱跡には円形・方形のものがあるが、小円形のものが多い。トレンチの西側では、「地山」と考えられる黄灰色粘土層を削り込んだ砂層がみられ、北方から南方へ流れ込んだものと推定される。長岡京の条坊に関連する遺構は検出されなかった。出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器などがある。

おわりに 今回の調査で次のことが判明した。水田耕作に伴う削平や盛土がみられるが、第251次調査第5トレンチより西では、坂川の影響も少なく比較的安定した場所であった。少なくとも弥生時代後期には、この周辺に人が居住していたものと推定される。また、土塚状落ち込みには完形に近い須恵器が多く、炭・焼土層から判断して近接した場所に居住地の所在が考えられる。そして、平安～中世時期の多数の柱跡群が示すとおり、連綿と人々の生活が営まれてい

た。その後、当地は現在のような水田として利用され続けている。長岡京の推定四坊坊間小路・同第二小路に関連するものは未検出であり、その存在の有無については判明していない。今後の詳細な検討が必要である。

今回の調査で長岡京遷都以前・以後のこの地域の様相を知るうえで、貴重な資料を得ることができた。

(石尾 政信)



第2図 右京第251次調査平面図

24. 平安京跡（左京北辺三坊五町）・内膳町遺跡

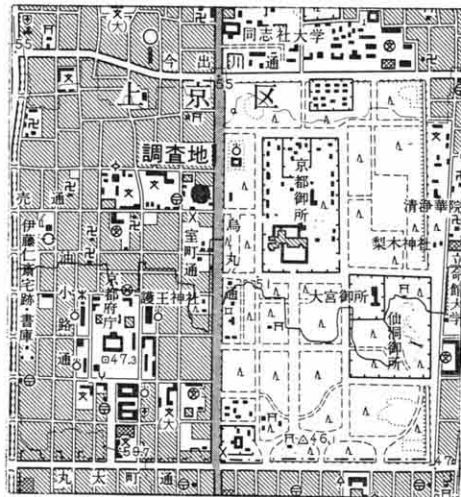
所在地 京都市上京区烏丸通中立売上ル龍前町590の1ほか
調査期間 昭和61年10月1日～昭和62年6月6日
調査面積 約1,700m²

はじめに 調査地は、京都御所の西隣に位置しており、緑が多い地域の一面を占めている。今般、京都府の旧知事公舎を取り壊して、(仮称)府民ホールを建設する計画がなされたため、その事前調査として2年度にわたる発掘調査を実施した。前年度は、旧知事公舎本館の周辺を対象とし(第1次調査)、今年度は本館の直下を対象とした(第2次調査)。

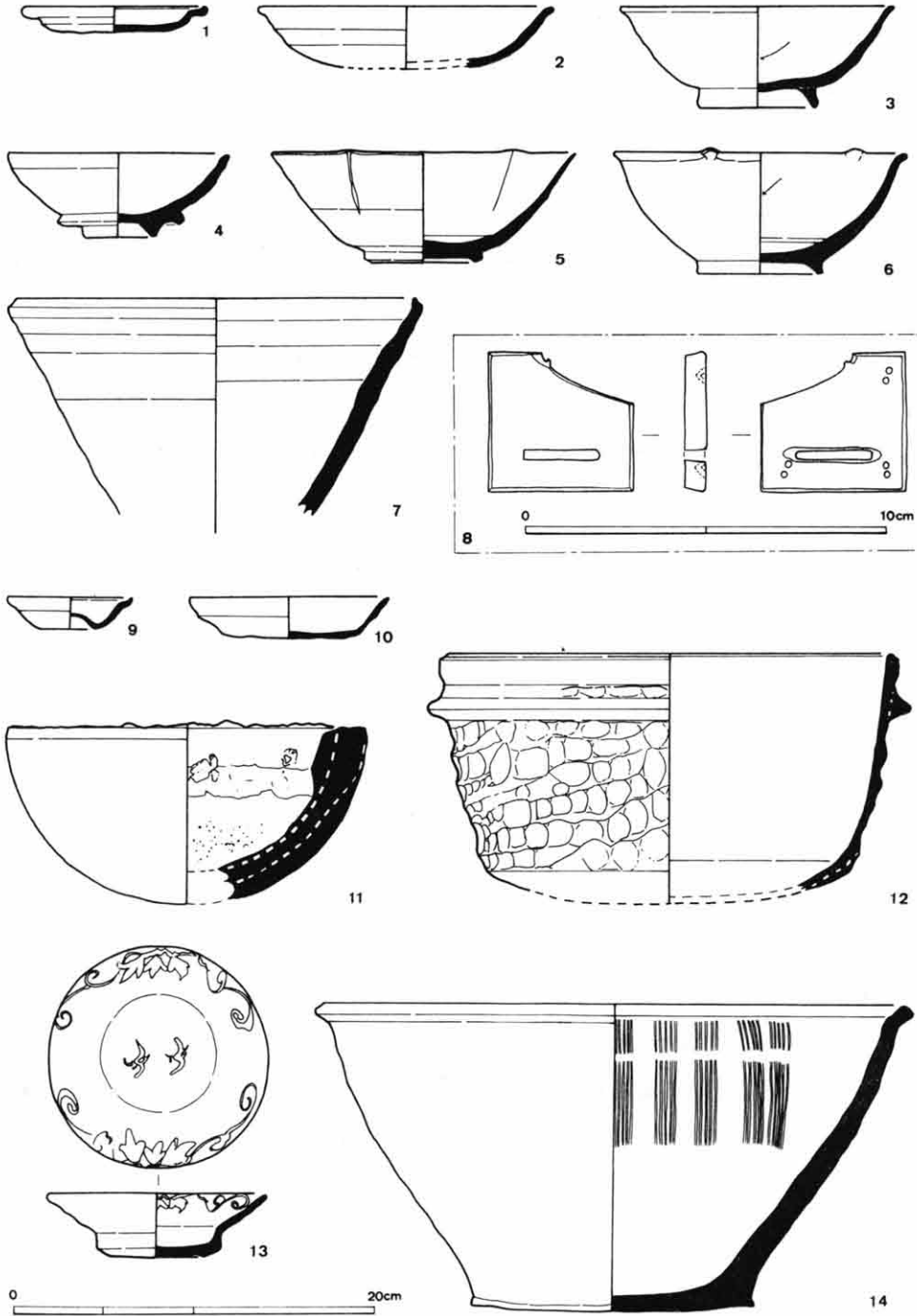
調査概要 調査地は、(財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京条坊復元図によれば一町の南部に位置している。基本的層序は、地表下約80cmほどで天明の火災層(1788年)があり、同1mまでが江戸時代の土層で17・18世紀の遺物が多量に出土した。そして、同1.6mまでが、平安時代初期までの土層で、それ以下に弥生時代の土層が存在すると思われるが、ほとんど遺存していなかった。遺構・遺物は多種多様にわたるが、今回はそのいくつかを紹介するに止めたい。

(第1次調査) トレンチ3本(第1～3トレンチ)を設定した。第1トレンチは、もっとも西端にある。この地点では、平安時代の井戸(SE45)を検出した。掘形は一辺約6.1mと非常に大きい方形を呈しているが、深さ1mのところで一辺約3mと狭くなっている。深さ約4.5mで木枠が発見された。これは「縦板組横棧どめ」と分類されているものである。四角に組んだもので、一辺約80cmある。棧は12cm角の材を使用していた。縦板の幅は約20～30cmである。底までの深さは約4.7mであった。井戸からは、土師器高杯・皿、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、白磁椀、青磁椀、須恵器鉢などが出土した。また、石銚帯も出土した。土師器皿の編年観に従えば、11世紀初め頃といえよう。

第2トレンチは、もっとも南端にある。各時代の井戸や、安土・桃山時代から江戸



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 出土遺物実測図

1~8: SE45, 9・10: SE52, 11: SK503, 12: SK400, 13・14: SK303,
 土師器皿: 1・2・9・10, 灰釉陶器碗: 3, 緑釉陶器碗: 4・6, 白磁碗: 5,
 須恵器鉢: 7, 石鈔帯: 8, る鍋: 11, 瓦器鍋: 12, 志野鉄絵皿: 13,
 信楽鉢: 14

時代にかけての地下式石組遺構などが検出された。安土・桃山時代の遺構としては、この他に溝や土塚があり、いずれも焼土や炭化物の入った埋土であった。遺物は金箔瓦が目立つ。出土地点は全域にわたるが、特にトレンチ東部で榎先瓦が集中して発見されており、北部中央では「佐竹扇」と言われる家紋のある軒平瓦が出土した。なお、17ラインに沿って南北方向の溝があり、その付近には特に平安時代初期の整地層が残っていた。

第3トレンチは、もっとも北端にある。一部第1トレンチと接続している。小さな遺構が中央から東に集中し、西部には天明の火災に伴う土塚が集中していた。なお、第2トレンチと同様に、17～18ライン付近には、平安時代初期の整地層が比較的残っていた。

(第2次調査) トレンチ1本(第4トレンチ)を設定した。北端は第3トレンチと接続している。ここでは、掘立柱建物跡を発見した。また、安土・桃山時代の土塚の中で、る壺やふいごの羽口や青銅片などを発見した。炭なども発見されることから、ここで銅製品を鋳造していたと推定できる。

まとめ 実に多岐にわたる成果が明らかとなったが、ここで、二次にわたる調査成果の要点を列記し、当該地の様相を明確にしておきたい。

(1) 縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡の一部であることが判明した。しかし、遺物のほとんどは、平安時代の整地層の中に混入した状態で発見された。

(2) 平安時代の大きな井戸が検出された。一町の中に占める位置は、中央やや西寄りであること、これ以外に同期の井戸が検出されなかったことから、一町を占有した屋敷であったことが推定できる。また、発見された石銚帯は、大きさや色から貴族の持ち物である可能性が高い。

(3) 鎌倉時代後期から室町時代初め頃の井戸を発見した。河原石を積み上げたもので、これも一町の中に占める位置から、使用した住人は1町もしくは半町を占有していた可能性が高い。なお、共同井戸である可能性も十分にある。

(4) 安土・桃山時代の遺構・遺物は、第4トレンチを取り囲むように発見された。特に北部では銅製品を鋳造した場所である可能性が高く、戦国大名と鋳物師の関係を考える上で重要な資料となった。

(5) 江戸時代前期から中期にかけての粘土採取土塚が発見された。これは、文献にみえる京焼きの一種である「御菩薩池焼」の内窯と関連があるのかも知れない。

(伊野 近富)

25. 上人ヶ平遺跡

所在地 相楽郡木津町市坂上人ヶ平5・6・8・15・16・19～21・34～36番地
 調査期間 昭和61年9月3日～昭和62年2月30日
 調査面積 約1,700m²

はじめに この調査は、関西・文化学術研究都市の開発に先立つ木津町東部地区での事前調査である。現在までに遺物散布地8か所と古墳推定地7か所の調査を行った。

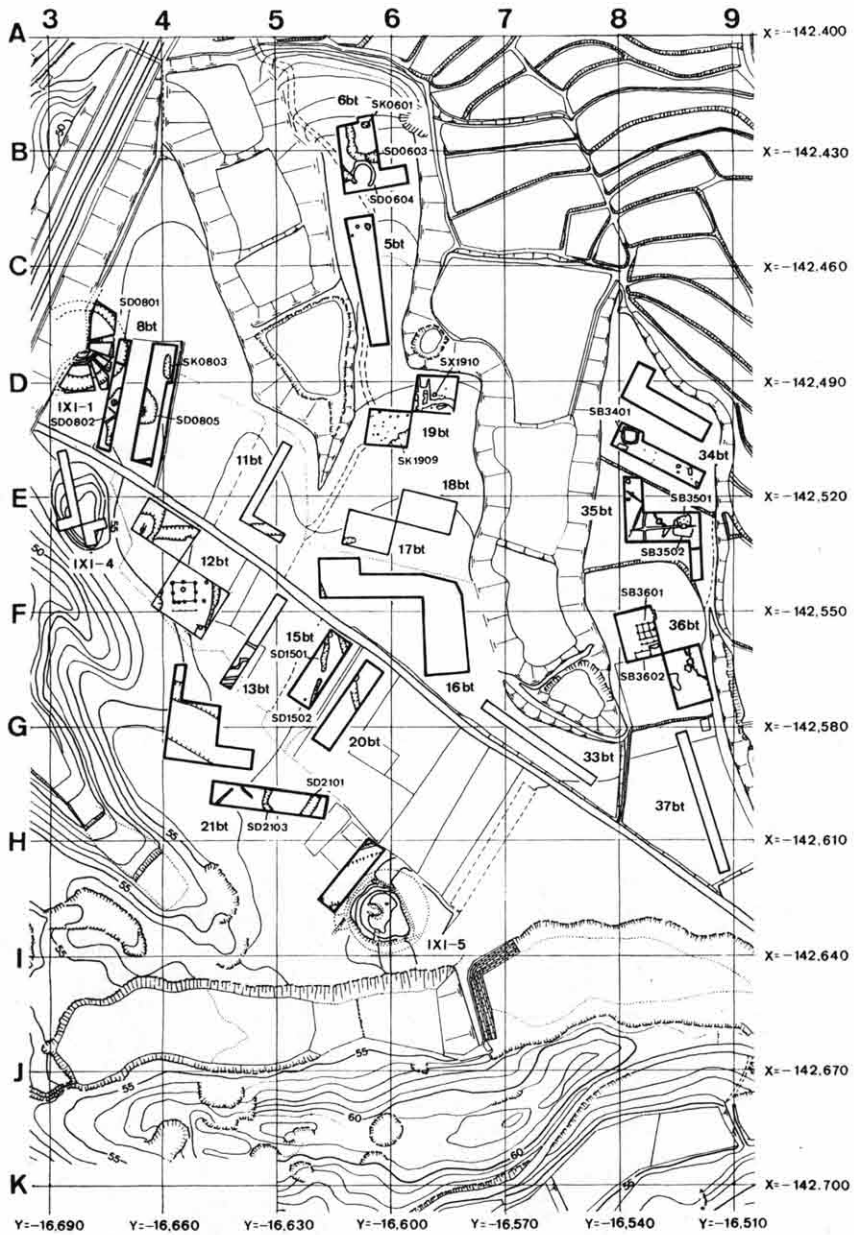
上人ヶ平遺跡は、相楽郡木津町の東部丘陵南西に位置し、標高は55～58mで、西に見下ろす平野部との比高差15～18mを測る台地状の地形を呈する。この遺跡は、木津町東部丘陵の中でも最も平野部に突き出している、たいへん眺望のきく立地である。

昭和59年度の調査では、奈良時代の建物跡や溝などが発見されており、奈良時代の土器や瓦、古墳時代の土器や埴輪などが出土している。この遺跡の周辺には、上人ヶ平1～5号墳(5号墳＝市坂古墳)や、平城宮大膳職に使用する瓦を焼いたと考えられている市坂瓦窯などが古くから知られている。以下、昭和61年度に行った上人ヶ平遺跡の調査成果のうち、主なものについて報告したい。

調査の概要 上人ヶ平遺跡では、現在までに合計10地点(17トレンチ)での試掘調査を行



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 上人ヶ平遺跡遺構配置図 (トレンチ位置については略測も含む)

っている。

- (1) 34番地 古墳時代の竪穴式住居跡1基と、土壇3基を検出した。竪穴式住居跡SB3401は、一辺約4mで方形を呈する。壁際には、幅約30cmの周壁溝がめぐっており、溝の中からは、高杯(布留式)が1点出土している。住居の中央には、炭や灰が散らばっていた。
- (2) 35番地 古墳時代の竪穴式住居跡2基と、土壇2基を検出した。竪穴式住居跡SB3501

は、一辺約3mの方形を呈す。建物跡のなかには、50cm×40cmの方形の土壇があり、その中央には、直径30cmの円形の土壇が深く掘り窪められていた。ここからは、小型壺(布留式)が1点出土した。また、SB3501に先行する堅穴式住居跡SB3502は一辺が約5mの方形を呈し、SB3501の建て替えと考えられる。

(3) 36番地 掘立柱建物跡2棟と土壇を5基以上検出した。掘立柱建物跡は、直径30cmの柱掘形をもち、柱間が1.8~2.1mを測る。南に廂をもつ2間×3間以上の東西棟SB3601と、同じく2間×1間以上の南北棟SB3602を検出している。土壇SK3602からは、土師器の甕(布留式)が出土した。また、包含層の中から奈良時代の布目瓦などが出土している。

(4) 6番地 土壇や溝・ピットなどを検出している。土壇SK0601からは、庄内併行期の壺が出土し、ピットP-001からは、弥生土器の甕(後期)が出土している。また、周溝状遺構SD0603・SD0604からは、弥生土器の小さな破片などが数多く出土している。

(5) 19番地 溝や焼土壇、柱穴などを検出している。焼土壇SX1910は、1.3m×1.0m・深さ0.3mを測る。壁面が修復され、繰り返し使用されたことが窺える。南寄り、瓦溜りSK1909を検出した。

(6) 8番地 昭和59年度に調査した上人ヶ平1号墳の周溝SD0801と、周溝状遺構SD0802・05、土壇SK0803などを検出した。SD0805は、幅約3.0m・深さ約0.5mを測る。溝内からは、土師器甕・黒斑をもつ蓋形埴輪・須恵質の円筒埴輪などが出土した。SK0803は、6.3m×1.5m・深さ約0.3mを測る。土壇底より土師器の高杯が置かれた状態で出土した。

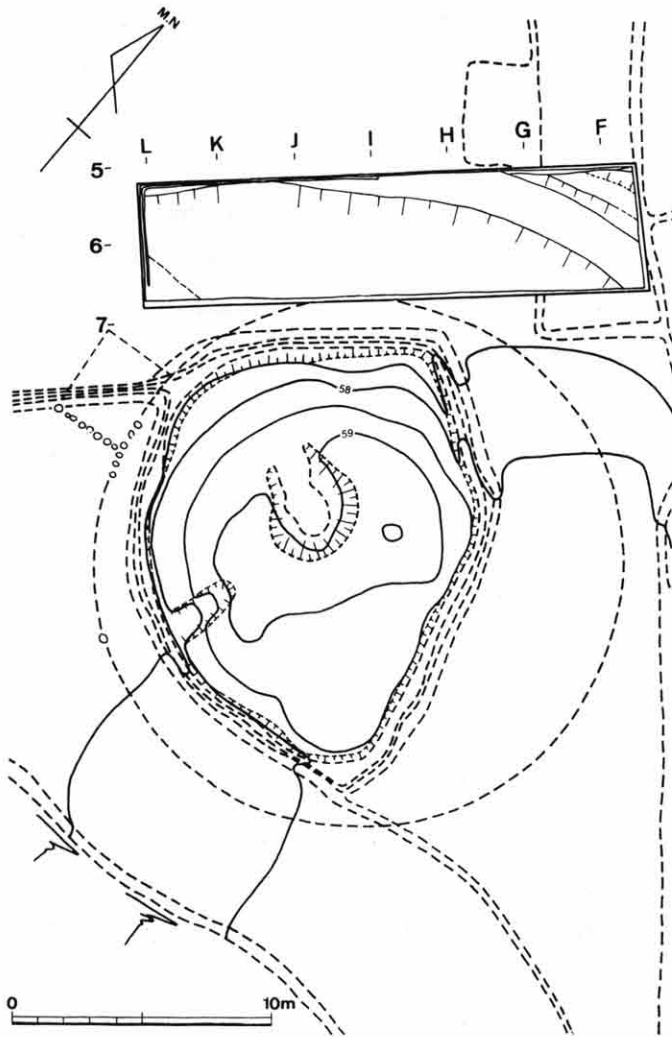
(7) 15・16・20番地 南北にのびる溝2条とピットを検出した。溝SD1501は幅約1.5mで、9.5m分を検出した。溝SD1502は幅約1.3mで、8.0m分を検出した。溝内からは多量の布目瓦が出土した。

(8) 21番地 1トレンチでは、幅約5.2mの谷が東から西に向かって開いており、深さ約2.0m埋められているのを確認した。谷の肩部では埴輪や布目瓦が広く散布していた。

2トレンチでは、溝状遺構4本と、攪乱土壇多数を検出した。溝SD2101は、幅約2.7m・深さ約0.5mを測り、長さ約6.2mを確認した。溝内からは上層で布目瓦・土師器・須恵器、中層で埴輪が出土した。溝SD2103は、幅約2.0m・深さ約0.2mを測り、長さ約6.0m分を確認した。溝は南で東に曲がる様相を呈している。溝内からは布目瓦・土師器・須恵器、埴輪などが出土した。

3トレンチでは、上人ヶ平5号墳の周溝とその外堤を検出した(第3図)。周溝は、2段に掘り込まれており、幅約5.0m・深さ約0.6mを測る。外堤は、幅約2.0m・高さ約0.2mを測る。周溝の上・中層からは布目瓦・土師器・須恵器、中・下層で埴輪が出土した。

まとめ 61年度の調査では、古墳時代の遺構・遺物が数多く発見された。上人ヶ平遺跡



第3図 上人ヶ平5号墳(市坂古墳)平面図

『龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ 南山城の前方後円墳』

龍谷大学文学部考古学資料室 1972より転載加筆

されたものと解釈される。さらに、南に所在する市坂瓦窯の性格を考えあわせると、当瓦窯の操業にかかわり、各種の施設として営まれた可能性を指摘できるのではないだろうか。この点については、今後の詳細な整理・検討をまって細述したい。

の調査は現在も進められているが、丘陵の北端で発見された弥生時代の遺構・遺物や全域に広がりをもつ古墳時代の遺構・遺物は、古くからこの台地が、人々の生活の場として利用されていたことを窺わせるものである。

昭和59年度に検出した奈良時代の遺構は、昭和61年度の調査では、さらに東に広がる様相を示している。上人ヶ平遺跡には布目瓦が全域に散布しており、この時代の遺構が全域に包蔵されている可能性がある。

これら奈良時代の遺構群は、東西・南北に区画された様相を呈しており、計画的に開発

(戸原和人・荒川 史)

紹介『京都府埋蔵文化財論集』

都 出 比呂志

1 全員参加の論集

読みごたえのある論文集が刊行された。(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが、創立5周年を記念する企画として発行したものだ。まずは、この書物が世にでたことを喜び、この大事業を取行されたセンターと、編集委員会諸氏のご苦勞に敬意を捧げたい。

大事業と表現すると、お世辞と取られかねないが、本書の発刊がすばらしいことだと思うのは、私だけではなからう。まず、センター職員のほぼ全員が執筆に参加されただけでなく、理事の諸氏や元職員、そして京都府教育委員会や丹後と山城の郷土資料館の技師の人々が執筆に加わっており、まさに京都府の行政に関わる研究者のオン・パレードとなったのは、なによりうれしいことだ。

財団法人の埋蔵文化財センターが、この種の論文集を刊行したものとしては、千葉県のセンターの10周年記念論文集がある。なかなか力作揃いの論集だが、職員全員の参加ではない。自らの調査によって極めて重要な資料を手元に蓄積していながら、日々の発掘調査に追われる結果、論文にまとめる時間的余裕に乏しい多くの技師の人々の力作が、京都において、このような形で揃ったこと、それをあえて実行に移されたセンターの英断に拍手を送りたい。

2 『論集』の構成

参加した執筆者の総数53人、全体で600ページにおよぶ大部な論集である。その内容は、センターが作成した説明によると、「考古学33、歴史学11、民俗学2、随想5、その他2」という分類となる。時代も旧石器時代から江戸時代の広い範囲にまたがり、私の力では、その全部についての的確な評価は不可能である。『論集』が出来上がった直後、杉原和雄さんから、この分厚い本を紹介せよと預かって以来、時間を見つけては一編、一編の論文に目を通しながら、随分と勉強をさせてもらった。

個々の論文の扱う時代は実に多様であり、その内訳は旧石器時代1、縄文時代2、弥生時代2、古墳時代8、飛鳥・奈良時代16、平安時代4、鎌倉・室町時代6、江戸時代2となり、この他に時代を越えた地域論もある。

これを、さらに大きく括ると、旧石器から古墳が13、飛鳥・奈良が16、平安以降が12となり、かつての考古学で主流を占めた古墳時代までの研究が3分の1の比重に減少しているのが注意される。文献史料のある時代の考古学がいかに大きな比重を持ち始めたかがわかる。これは宮殿・官衙や古代・中世の寺院などの発達した京都の特質であるかもしれないが、中世の土器や墓制の研究で目覚ましい前進がある現状は、第二次大戦以後の旧石器研究の進展に似ている。もはや、この時代のことを文献史料のみによって語ることは不可能となった。また逆に考古学者は、文献史の成果を無視して発掘を実施することは出来なくなったのである。この『論集』に文献史、建築史、民俗学の研究者の参加があるのは、その点で力強い。

3 京都府にねざした研究

『論集』の成果の一つは京都府下を舞台とする資料調査を基礎とするものが過半数を占めることである。考古学に限らず、文献史や民俗の研究でもそうだ。丹波・丹後の北部にねざすものが17編、山城を基礎とするものが12編、あわせて29編が、発掘や資料調査における発見を出発点として問題を広げ、全国的視野の研究にも問題提起している。

縄文時代から古墳時代 丹後の縄文資料を基礎とした長谷川達氏、三好博喜氏の論文からは京都府北部の縄文時代研究の最新の成果が学べる。前者は遺跡分布論に重点があり、後者は由良川下流の前期の土器の詳細である。また八幡市狐谷遺跡の絵文文様ある土器を葬送儀礼と関係させた田代弘氏、八幡市幣原遺跡の弥生土器における近江との技法交流を考察した石井清司氏は弥生土器について新しい研究の方向を示した。石棺の集成と型式学的研究を行い、かつ使用石材とその分布に地域性があることを指摘して丹後の古墳研究の今後の方向を示した堤圭三郎氏、丹波の大型方墳を考察し、同じ丹波でも北部と南部とでは前方後円墳との共存の有無において差異があることを指摘し、両地域の首長の政治的地位の差を論じた平良泰久氏らの研究から、ともすれば軽視されがちな畿内と丹波・丹後との関係が浮き彫りにされた。丹波・丹後の古代氏族の基礎的考察を行い、門脇禎二氏の丹後王国論を批判的に検討した磯野浩光氏の論考とともに古墳時代の政治史研究に貴重である。丹後半島の古墳時代から中世にかけて近年の成果を総括して地域史的観点を示した岡田晃治氏や八木町青戸遺跡の須恵器資料を紹介した岡崎研一氏らの作業は地味ではあるが基礎的な資料調査の成果である。また、由良川流域の古墳時代集落における竪穴式住居の規模の差のもつ意味を考察した西岸秀文氏や竪穴式住居における竈の有無から古墳時代の集落論に新しい切り込みを意図した岩松 保氏らは、中丹地域の8世紀の竪穴式住居と掘立柱建物との関係を扱った藤原敏見氏とともに集落研究の新しい方法を模索している。

また樋口隆康氏は京都府下でここ数年の間に発見された6面の鏡について全国の関連資料との比較を行っており、私などは、その埋納年代の評価について困っていた福知山狸谷鏡について明快な答えを得られて、ありがたかった。

飛鳥・奈良時代 丹波綾中廃寺の創建年代を決めるために、7世紀を中心とする土器編年を再検討した小山雅人氏、八幡市平野山の初期瓦窯の瓦の技法を細かく研究して隼上り瓦窯との差異を指摘した肥後弘幸氏、広隆寺出土瓦の型式学的研究から、7世紀前半の山城の瓦工人の動きや北野廃寺と広隆寺との関係を説いた森下 衛氏、福知山市和久寺の瓦の様式を細分して工人の動態の解明を意図した大槻真純氏、これら4氏の論文は古代寺院の研究にとって土器や瓦の型式学が如何に基礎的で重要であるかを教えている。

古代の都城や条里制の研究は京都府において重要テーマの一つであるが、恭仁京の朝堂院地区の最近の成果を総括した久保哲正氏、恭仁宮研究と切り離せない豊原離宮の位置の探究について研究の展望を示した中谷雅治氏らの研究は木津川地域の都城制研究が組織的に進展していることを示している。亀岡盆地の条里制地割を航空写真の読み取りから分析した足利健亮氏が6町単位の方格線と国府や国分寺の位置に密接な関係があることを指摘していることは注目される。

奈良時代から平安時代にかけての二彩や三彩の陶器を扱ったものが期せずして3編ここに集った。奈良時代の三彩小壺を全国的に集成し、仏具に組み込まれた他の三彩陶器との性格の違いを主張した奥村清一郎氏、長岡京出土の二彩陶器の祭祀的性格を説いた山口博氏、緑釉の唾壺を集成しその変遷観にもとづき、日中における唾壺の性格の相違を問題とした石尾政信氏などの論考がある。

平安時代以降 まず、この時代の研究の基礎となる土器や瓦、また瓦窯に関する論文がある。丹後地方の黒色土器の編年をもとに盛行年代を明らかにして、土師器や瓦器との関係を明らかにした竹原一彦氏、10世紀から18世紀にいたる「かわらけ」の変遷を述べ、生産体制と需要との相関関係を明らかにして土器生産を社会のなかで捉える視点を示した伊野近富氏はともに京都の資料を基礎としている。平安京に運ばれた香川県西村瓦窯の年代を12世紀と推定した松井忠春氏の作業は、亀岡市篠窯で検出された焼土壇の性格を様々な角度から吟味し、木炭を焼く窯と結論づけた水谷寿克氏の考察とともに、平安時代の窯業や製品の流通問題に迫る基礎的研究である。

中世から近世の墓制や信仰に関する遺構を考察した研究も注目にあたいする。北部地域の経塚の基礎調査にもとづいて、群をなすものや墓的な性格を考えるべき経塚が存在することを指摘して経塚の見直しの必要を説く杉原和雄氏、加茂町の前柵遺跡の中世墓の調査成果を基礎に、これを僧侶階層の墓と推定した戸原和人氏、醍醐寺三宝院の宝篋印塔基壇

の発掘成果を要説するとともに、墓の形成過程、使用された大甕などの構成とその年代など重要な事実を明らかにした増田孝彦氏、同じ遺跡の塔の変遷を考察して17世紀に近世的墓塔への転換があったことを説いた引原茂治氏など、これらの論考は活発化しつつある中・近世の墓制研究に問題を提起したものと言えよう。

また石川登志雄氏は宮津市成相寺にある「丹後国田数帳」の分析から荘・郷・保・社寺の土地領有関係を考察しただけでなく、この史料の形成過程の研究によって新しい問題が発見しうることを説く。平安京の研究の古典である裏松固禪の『大内裏図考証』の成立と補正の過程を考察した福田敏朗氏の作業とともに史料学的方法の検討が重要なことを示す仕事である。

民俗資料・技術史資料 伏見区舞台町の京瓦の生産技術を克明に調査し、技術史的研究に貴重な資料を提供した印南敏秀氏や丹後地方の田下駄の民俗資料を考察し苗代用と本田用とがあることを明らかにした井之本泰氏の論考は考古学を専攻するものにとっても大変ありがたい研究である。

また、竹井治雄氏は遺跡調査における測量に関して、国土座標を基準とする測量の効用について京都府におけるいくつかの経験を踏まえて述べ、その普及の必要を力説する。

4 ひろく他地域の資料をも駆使

京都府下の資料のみならず、他地域の資料をも駆使した論考もある。静岡県広野遺跡のナイフ形石器文化の敲石の分布の考察から敲石の機能差を考えようとした黒坪一樹氏の論考は『論集』で唯一の旧石器時代の論文である。また、環状鏡板を実用の馬具と考え、馬の制御機能を考察し、かつ戦闘における馬利用のありかたを追求した荒川 史氏、中空の耳環が他の耳環と区別しうることを、またその盛行期が6世紀後半にあることを説いた小池寛氏の論考などは古墳時代の遺物の基礎的研究である。

郡名のつく寺院と郡司との関わりを考察し、天武14年の「諸国每家作仏舎」の家を郡衙と解した辻本和美氏の論考は議論を呼ぶ意欲作と思われる。飛鳥寺の漢風名である「元興寺」「法興寺」の呼称を考察した田中 彰氏は、後者は記録にのみ呼称されるものと推測し、元興寺こそが、当時使用された漢風寺名と結論した。

福山敏男氏は難波宮跡出土の「宿世」木簡に関連する仏教関係の原典を丹念に比較・考証し、それが玄奘訳の『俱舍論』と関係することを述べ、さらに、これが書かれた状況にまで言及したのは興味深い。また高橋美久二氏は竜野市小犬丸遺跡の鳥形木製品を重要なよりどころとして駅家の鳥居を考察し、鳥居の起源に関して考古学者の立場から重要な提言をした。

「国判」に押された倉印を考察した土橋 誠氏は印の使用のありかたを分析することによって文書様式の基礎的研究を示すとともに、倉の管理をめぐる国衙権力の動向を追求しようとしている。また小泉信吾氏は、遺跡で出土した将棋の駒を型式分類し、時代変遷を説く。駒を古いに使用した平安時代の例などを示して、駒の出土が直ちに将棋をさした証明にはならないと警告しているのは注意される。

建築史の川上 貢氏が富山県立山の室堂の建築様式を中心に総柱建ての建築様式の古拙性を論じ、それが近世に発達した梁架構方式によって駆逐されたと説く論考から、近世以前の遺構の調査に携わることの多い私たちは貴重な示唆を得る。

中国江蘇省の淹城についての原口正三氏の論考は、弥生時代の環濠集落の源流を中国の遺跡のなかに求める試みの一つである。私もこの遺跡には注目していたが、訪中した人の見聞によって、その規模の巨大さや構造が具体的になったのは喜ばしい。また、これをもとにした原口氏の考察は的確である。

5 現代社会と考古学

考古学は現代社会に生きている。社会との接点を求めて様々な努力があるが、京都府の文化財行政の第一線を指導する金村允人氏が行政の現状を統計資料を示して分析し、その展望を示している。また安藤信策氏は考古学の現代における意義と目的をロマンを込めて語る。「たとえ明日が終わりの日であっても、私は今日りんごの木を植える」という言葉を引用する氏の美しい心を忘れないでおきたい。また佐原 真氏の「考古学をやさしくしよう」は博物館の展示、発掘の説明会、講演などの具体例をあげながら、学問を市民に語りかける真心の必要を説いて有意義である。この文章自身の語り口の軽妙さは、早くもその模範を示したものといえよう。

西芳寺貫主の藤田价浩氏は「禅窓」と題する一文をよせる。下手な紹介は雰囲気壊す。是非、一読を勧める。長関和男氏のボロボドール遺跡の貴重な見学記、古沢俊彦氏の情熱あふれる中国訪問記からは、国際化を迎えた私たち日本人の心のもちかたを知らされた。

6 おわりに

センターが発足した時、私などは、この機関が遺跡の事前処理の行政のためではなく、遺跡の保護と調査・研究のために有効なものになってほしい、と願った。また、そのためには、センターの調査員が京都府下の遺跡に責任を果たせる研究者として働けるような研究環境が必要だと思った。この『論集』を読みつつ、センターの中ですばらしい研究成果が生み出されつつあることを知り、大変うれしかった。この仕事を完成された原口委員長

はじめ編集委員会の人々の労は、なみなみならぬものと推察する。

『論集』の紹介を引き受けた時、全体の傾向などを論評した短い文章にするつもりであった。読み進むうち、それでは個々の執筆者にすまない気持ちが強くなり、私が感銘を受けたり印象に残ったことを一、二行ずつ書く方針に変えた。そのために執筆者本来の主張から外れた紹介となったものもあろう。お詫びしたい。

これほどの資料があれば、もう少し主張してほしい。何故ここで考察を止めるのか。この論理は飛躍ではないか。などなど、読みながら感じることもあった。しかし、それぞれ持ち味のある論文ばかりであった。若い調査員の人々の論文には、力を込めたものが多い。熟練者のものには、後進に展望を示す論文が多い。これは京都府の考古学の将来を考えるうえで心強いかぎりである。

この『論集』には第一集とある。何年か後に第二集、第三集が刊行されることを強く期待して、紹介の筆をおくことにしたい。

(つで・ひろし=大阪大学文学部助教授)

資 料 紹 介

森本遺跡の人面付土器

國 下 多美樹

1 はじめに

京都盆地南西部、桂川の右岸域には現在40か所以上の弥生時代の遺跡が知られている。その北部に位置する向日市・森本遺跡は、弥生時代前期～後期の拠点的大集落跡と考えられている。1970年、この森本遺跡の初の本格的な調査が行われた。この調査では、弥生時代中期と後期の水路が発見され、大量の弥生時代の遺物が出土している。その中でも後期水路から発見された人面付土器は他に例を見ない貴重な資料として今日でもその学問的評価は高い。出土後も多くの研究者によって取り上げられているが比較材料の少ない現在ではその性格は推定の域を脱していないといえよう。

筆者は、一昨向日市文化資料館で行われた特別展「米作りの伝来と乙訓」の資料調査をするなかでこの人面付土器を実測する機会を得た。今回は資料紹介としてこの人面付土器を取り上げ、できる限り細部の観察結果を記述した上で若干の私見を述べたい。

2 人面付土器の観察

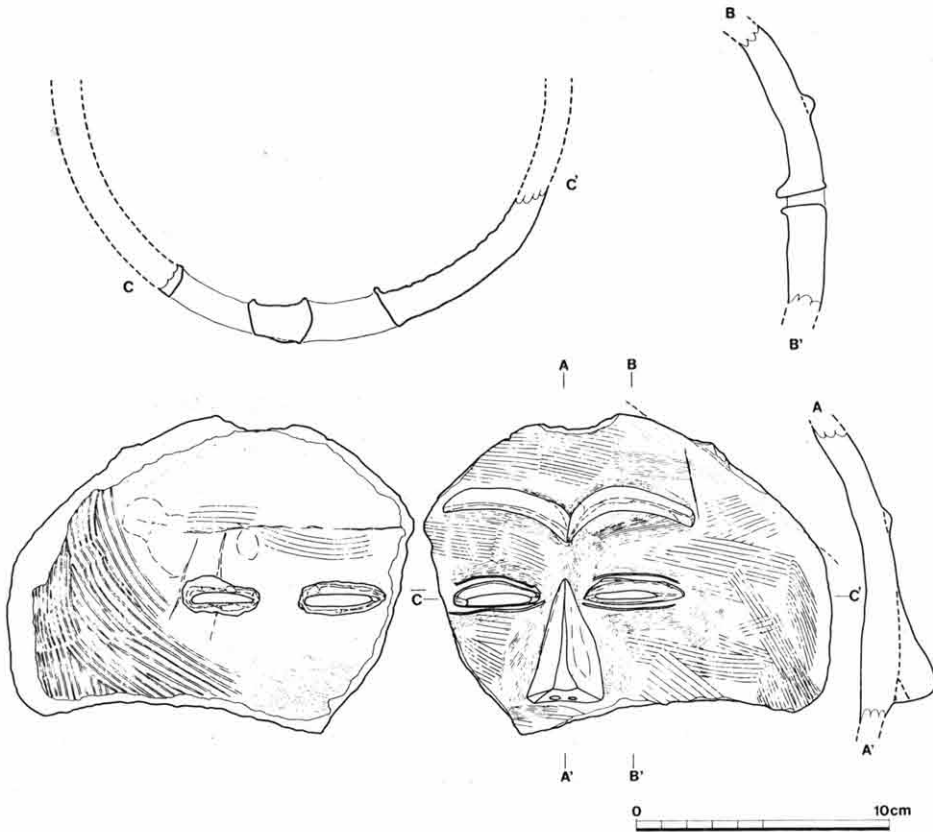
a 概観

人面付土器は、彎曲する土器の体部外面(土面とすれば粘土板)に粘土の貼り付けや穿孔によって目、鼻、眉を表現したものである。破片の左側に、鼻を中心にしてほぼシンメトリーに目、眉を配している。破片は、長軸16.2cm・短軸12.5cm・厚さ1.1～1.5cmを測る。

b 各部位の観察

目は、ヘラ状工具で外側から内側に向かって木ノ葉状に粘土を抉り取ることで表現する。その際の粘土のはみ出しが内面に残されている。左目は、幅1.0cm(内面1.4cm)、長さ4.0cm(内面3.0cm)、右目は、幅1.0cm(内面1.3cm)、長さ3.4cm(内面3.4cm)。両目の目頭間は1.7cmを測る。また、両目の上下端には、並行してヘラ状工具による沈線がめぐる。この沈線が付加されることで目の周縁が隆起し二重瞼状を呈する。

鼻は、断面三角形の粘土塊を貼り付けて表現する。表面は、ナデによって平滑に仕上げられる。幅3.0cm・長さ4.8cmを測る。鼻孔は棒状工具の刺突によって施され、径0.5cm



人面付土器実測図

を測る。

眉は、断面三角形の粘土塊の貼り付けで表現する。鼻と同様にナデによって平滑に仕上げられる。眉は顔の中央部で両眉を接して貼り付ける。左の眉尻は、幅0.9cm・長さ4.0cmを測りやや丸みを帯びて終わる。右の眉尻は、幅0.9cm・長さ4.0cmを測りやや尖らせぎみに終わる。

他に破片の右上部(左眉の右上)に粘土塊の残欠と貼り付け痕が残る。左上から右下に向かって施されており、現存長4.2cmを測る。また、貼り付けた際のナデのラインを観察すると、貼り付けられていた粘土が直線的であったことが知られる。

c 成形・調整の観察

体部の成形は、粘土紐の巻き上げによって行われている。この巻き上げ痕が内面上部に一条残っており、このラインは目の横方向の中軸線と並行している。巻き上げ後、外面は右下がりの荒いハケ(5条/cm)を施し、鼻・眉→目の順に各部位を表現する。鼻、眉、目及び右上部の周縁は皮・布状のもので丁寧にナデられている。内面は右下がりのハケ(3

～4条/cm)を施した後、目、鼻の部分をナデ消す。しかし、ナデ消しが充分でないために指頭圧痕が残存する。概して内面は乱雑な調整で凹凸を多く残す。

d 胎土・焼成・色調の観察

胎土は、長石(1.0cm大まで)・チャート粒(0.5cm大まで)を含み、やや粗い。焼成は、良好である。色調は、内外面が黒色、断面が暗灰色を呈する。

3 ま と め

以上の観察結果を通じての私見を若干述べてまとめとしたい。

① 内面に残る粘土紐巻き上げ痕や内外面の調整状況及び彎曲状態から土器の体部の破片と考えられる。また、巻き上げ痕のラインと目の中軸ラインが並行することから、土器の体部に顔を正位置に表現していたと考えられる。

② 内外面に残されたハケの粗さや胎土を観察すると在地の中期前葉の土器と共通する点が多く、当該期の所産とするのが妥当と思われる。

③ 土器の体部として目の中軸ラインのカーブから体部径を復原すると直径20.6cmとなり、球形の体部をもつ広口壺と推定される。

最後に、資料の実測、公開を御快諾頂いた京都府教育委員会、および浪貝 毅氏、高橋美久二氏の両氏に深謝申し上げます。

(くにした・たみき=向日市教育委員会文化財保護係)

参考文献

- 吉本堯俊・北山 惇・浪貝 毅『森本遺跡発掘調査概報』長岡京発掘調査団 1970
浪貝 毅「森本弥生遺跡出土の人面土器」『古代文化』22-8 1970
柴田俊彰「人面付土器の意義」『古代学研究』23-1 1976
都出比呂志「弥生時代」『向日市史』上巻 1983 他

府下遺跡紹介

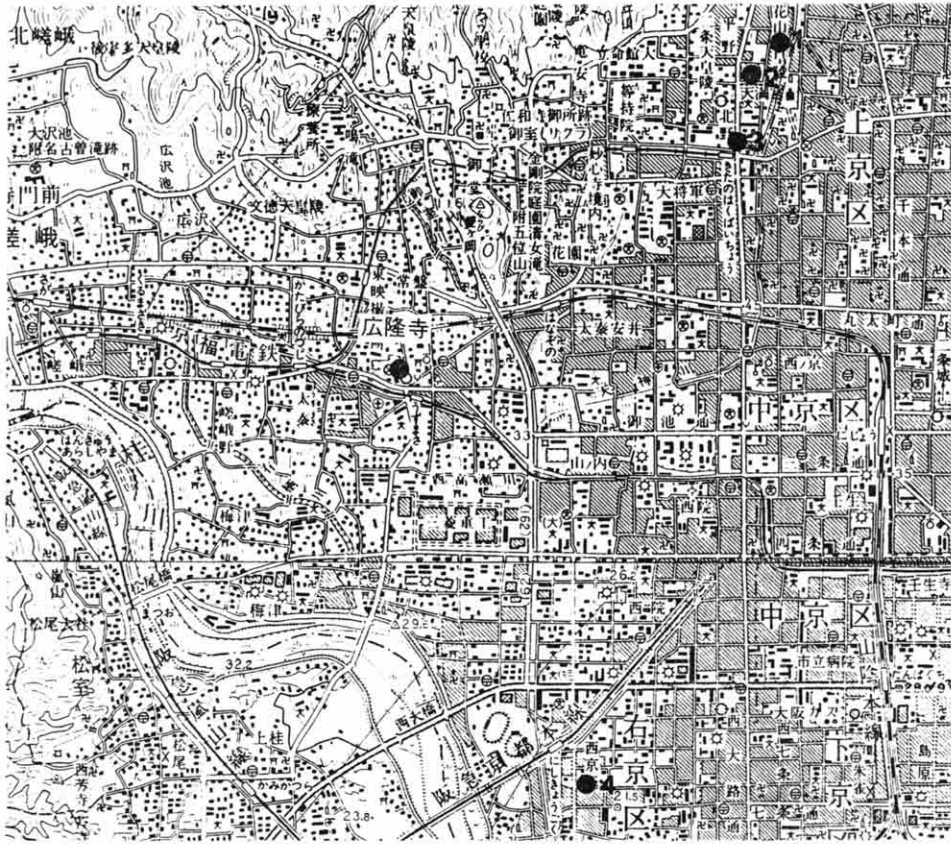
36. 広隆寺旧境内

京都市右京区太秦にある広隆寺は、現在でも聖徳太子の腹心の秦河勝が建立した寺院として広く一般に知られている。特に、この寺に安置され、国宝第1号に指定された弥勒菩薩像(半跏思惟像)は、飛鳥時代の仏像として著名なものである。

広隆寺は、『日本書紀』推古11(603)年十一月己亥条に「皇太子(聖徳太子のこと)謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得是像以恭敬拜、時秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺、」として出てくる「蜂岡寺」の後身に当たると言われている。また、同じ『日本書紀』の推古31(623)年七月条には、「新羅遣大使奈末知洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝、仍貢佛像一具、及金塔并舍利、且大灌頂幡一具、小幡二十條、即佛像居於葛野秦寺、以餘舍利、金塔、灌頂幡等、皆納于四天王寺、」とあって、「葛野秦寺」とも表記されている。むろん、蜂岡寺・葛野秦寺と広隆寺は別のものとする意見もあるが、普通は、推古11年条にみえる仏像を現存の弥勒菩薩像に比定している。とすれば、広隆寺の建立は、推古11年段階にまでさかのぼることになるが、他の史料から考えれば必ずしもそうはならない。

『朝野群載』巻第二「文筆中」所載の「広隆寺縁起」によれば、「謹檢案内、十一年冬、受佛像、小壘田宮御宇、推古天皇即位壬午之歲、奉爲聖徳太子、大花上秦造河勝所建立、廣隆寺者、但本舊寺家地九條河原里一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪、同條荒見里十坪十一坪十四坪十五坪合拾肆町也、而彼地頗狹隘地、仍遷□□□五條荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪、并六ヶ坪之内、即施入陸地肆拾肆町肆段壹陌玖拾貳歩也、」とある。この「広隆寺縁起」には、壬午年に広隆寺をつくり、それが後世になって寺地を他の場所に移したとするなど、『日本書紀』には伝えていない所伝を載せている。この壬午年は、推古30(622)年にあたり、聖徳太子の没後にあたっており、平安時代の『廣隆寺資財交替実録帳』でも推古30年広隆寺創建説を採用している。従って、そのため、推古11年に仏像を受けた秦河勝は、このころまで私的に仏像を祀っていたが、聖徳太子の死によって正式に寺としたとする考え方もある。

また、『上宮聖徳法王帝説』には「太子起七寺、」として「蜂丘寺」の名があがっているが、その割注に「并彼宮賜川勝秦公、」と記されており、宮が近辺にあったことを伝えている。『上宮聖徳太子伝補闕記』には、聖徳太子が葛野郡を巡行したときに「蜂岳南下」に宮を立てたとあって、『上宮聖徳法王帝説』に言う宮はこのこととみてよからう。この所

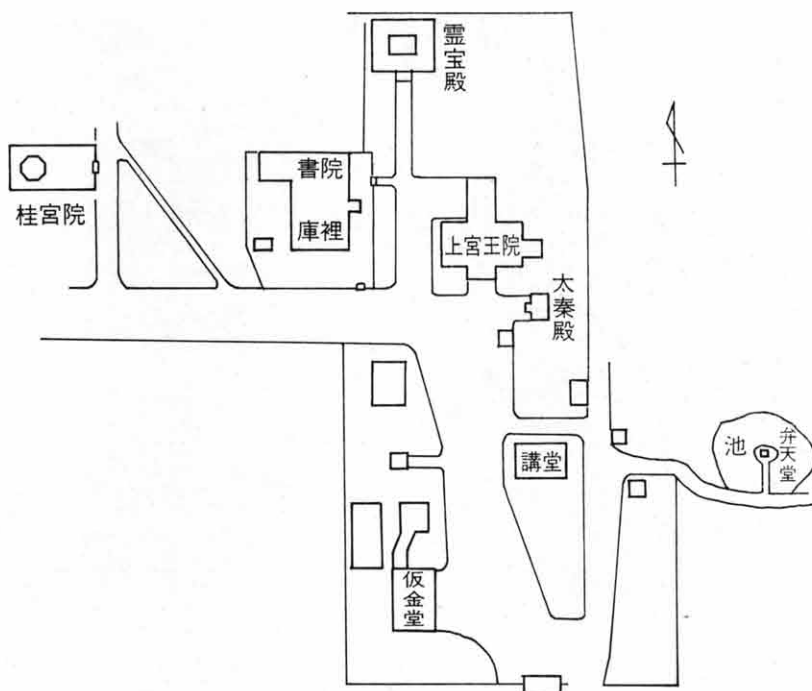


第1図 広隆寺及び移転前候補位置図 (1/50,000)

1：紙屋川上流右岸 2：平野神社付近 3：北野廃寺 4：川勝寺付近

伝は『日本書紀』にはみられないもので、聖徳太子の葛野郡巡行や宮の下賜は事実かどうか必ずしも明らかではない。従って、宮がたとえ付属していたとしても行宮のようなものであって、秦氏の本拠地に設けられたものであろう。蜂岡寺の建立は、この宮の存在とセットで考えるべきであるが、宮の跡地に寺が建てられたとすれば、推古11年以後の時点では考えにくい。しかも、「広隆寺縁起」のいう「推古壬午之年」は、後世に作文された可能性があり信用できず、『上宮聖徳太子伝補闕記』にみえる「斑鳩寺被災」の後、すなわち天智朝に建立されたとする説も存在する。

以上のように、広隆寺の創建に関しては、はっきりしない点も多いが、少なくとも葛野郡の地で推古11年に下賜された仏像を祀り、その後下賜された仏像も併せて聖徳太子との関係で祀っていたことだけは認めてよからう。ただ、その時期については、今のところ、①推古11年説、②推古30年説、③天智朝説、の3説があるが、「蜂丘之南」にあった聖徳太子の葛野宮との関連からみて、確実ではないが、推古30年説が妥当かもしれない。



第2図 現広隆寺境内略図（望月信成編『廣隆寺』より再トレースした。）

ところで、蜂岡寺は、先の「広隆寺縁起」によれば、いつの時点かで移転したことになる。古く喜田貞吉がこの縁起をもとに広隆寺移転説を唱えて以降、移転したことを疑う説はなく、移転前の所在地について、現在、①紙屋川(現在の天神川)上流右岸、②平野神社附近、③京都市北区白梅町北野廃寺、④京都市右京区川勝寺附近、の4説が提出されている。また、時期についても、①天智朝説、②平安遷都時説、の大きく二説に分かれている。

蜂岡寺が移転したことを記すのは、先の「広隆寺縁起」以外にはないので、少し検討してみる。移転前の寺地は、葛野郡条里九条河原里～荒見里にかけての14町の地であったという。この記載方法は、条里制に基づくものであるが、蜂岡寺が建立された推古朝には条里制は存在しなかったため、この部分は明らかに潤色を受けている。ただ、潤色されたとしても、①すでに当時は旧寺地が知られておらず、移転したという伝承のみがあって、全く架空に記述した場合、②旧寺地が古記録によって伝えられていたが、それを平安時代の地名にあわせて改変した場合、の二通りが考えられる。①の場合だとこの移転説そのものがあやしいということになるが、②が成立するとすれば、移転したことを疑うことはできない。「広隆寺縁起」には蜂岡寺の建立を推古30年とするなど、他の聖徳太子関係の史料には見られない記述があるだけでなく、秦造河勝の冠位を「大花上」と記述している。「大花上」は、大化5(649)年の冠位19階制のもので推古朝の冠位12階制とは異なるので、

「広隆寺縁起」自体を後世の作文とする見解もある。しかし、これを河勝の極冠と解釈すれば、それを書き記したものがあって、それを基にして記述したとも考えられ、「広隆寺縁起」の記載を信用することもできる。推古30年建立説も含めて、何らかの古記録に基づいて記述したと推定せざるをえない。従って、現時点では広隆寺移転説を否定することはほとんどできないが、条里制に基づいた旧寺地の記載については、なお検討の余地がある。すでに喜田が指摘しているように、すべてを旧寺地とすることで寺側に有利になるようにとの意識が働いたと解釈することができるからである。

ただ、条里制の記載による限り、喜田の言うように、平野神社から紙屋川付近という説は否定することができない。先に挙げた4説のうち、川勝寺とする説以外は、すべて近接しており、「広隆寺縁起」の記載に基づくものの、その旧寺地を最小限の範囲に考えると、この辺りに広隆寺の旧寺地を求めると自然である。しかし、『上宮聖徳太子伝補闕記』には、「蜂岳南下」に建立したとあるが、紙屋川上流付近に求めるとすれば、船岡山以外にはそのような岳はない。そのため、移転説にも若干の疑問はある。

次に、移転した時期であるが、これについては「広隆寺縁起」が何も記載していないため、確実なことは不明である。平安遷都時とするのは、寺地が大内裏と近接するためとするのが根拠となっているようであるが、川勝寺説以外の3説をとれば、いずれも京外である。従って、これのみでは根拠があまり確かとは言えないようである。一方、天智朝移転説は、喜田が唱えた説で、『上宮聖徳太子伝補闕記』の記述が根拠となっている。そこには、「斑鳩寺被災之後、衆人不得定寺地、故百済入師率衆人令造葛野蜂岡寺、令造川内高井寺、百済聞師、円明師、下氷君雑物等三人合造三井寺、」とあり、斑鳩寺(法隆寺)の炎上後百済の工人が葛野の蜂岡寺等を建立したことになる。喜田は、法隆寺再建論の立場から、天智9年の法隆寺炎上で百済の工人たちが広隆寺移転の工事を行ったと解釈した。すぐれた解釈ではあるが、天智朝に広隆寺が移転する理由がみいだせないため、喜田以後にこの記事は蜂岡寺の建立を述べたもので、移転を平安遷都時とするなどの様々な反対論が出されて今日に至っている。現実の発掘調査では、飛鳥時代の瓦も出土しており、移転したとしても、推古朝からそれほど隔たっていない時期と解釈する説もある。いずれにせよ、現時点では決定的な史料が存在しないため、今後の発掘調査の成果や新たな文献史料の発見等に期待したい。

広隆寺は、このように、いつの時点かははっきりしないものの、現在地に移転した。しかし、弘仁9(818)年に火災があり、広隆寺は、その堂舎や縁起類ともどもことごとく類焼したと伝えている。この時の火災で移転後の広隆寺の伽藍は失われたが、承和年間に道昌らによって復興され、さらに仁和年間には『廣隆寺資財交替実録帳』がつくられ、この

時点での広隆寺の資財等が明らかになった。広隆寺の第1次の復興はこうしてできあがったが、平安時代の終わりの久安6(1150)年正月19日の大火によって再び全焼した。このうち復興されるのは、保元の乱の後の永萬元(1164)年になってからである。『廣隆寺由来記』等によれば、このとき復興されたのは、檜皮葺金堂1宇・講堂1宇・常行堂・回廊・上宮王院・中門・鐘楼・経蔵の八棟となっている。このうち、講堂については、鎌倉時代や江戸時代に大修理を受けてかなり原形とは異なったものになったようであるが、現存する建築物では最古のものである。しかも、この講堂は、『廣隆寺資財交替実録帳』に見える講堂の規模と一致し、永萬元年の復興時の鐘銘に「悉尋其趾，新加修復，」とあることからみて、これを金堂と考える説もあるが、現在の講堂の位置は移転後の広隆寺講堂の位置にあると考えてもいいようである。

このほか、今日の楼門の東南よりのところに塔の中心礎石がある。この心礎は、現在石標の台石に利用されており、元の位置からはかなり動いていると見なければならない。この塔が本来はどの位置にあったかは不明であり、塔院として伽藍とは別のところにあったように『廣隆寺資財交替実録帳』には記載されている。

現在、広隆寺で著名な建造物は、桂宮院である。この建物は、建長3(1251)年に澄禪が建立した八角円堂で、国宝に指定されている。建物は、夢殿をほうふつとさせるが、この地がもとの塔院であったとする説もある。

(土橋 誠)

参考文献

- 喜田貞吉「山城北部の條里を調査して太秦廣隆寺の舊地に及ぶ(上)・(下)」(『歴史地理』25-1・2) 1915
- 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936
- 福山敏男「野寺の位置について」(『史迹と美術』87) 1938
- 橋川 正『太秦廣隆寺史』
- 田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』1944
- 小林 剛「太秦廣隆寺の弥勒菩薩について」(『史迹と美術』176) 1947
- 向井芳彦「廣隆寺草創考(1)~(4)」(『史迹と美術』229~232) 1953
- 平野邦雄『大化前代社会組織の研究』1969
- 『京都の歴史』1「平安の新京」1970
- 浪貝 毅「北野廃寺と廣隆寺旧境内」(『仏教芸術』116) 1978
- 坂本太郎『聖徳太子』1979
- 新川登亀男『上宮聖徳太子伝補闕記の研究』1980
- 森下 衛「廣隆寺出土瓦について—昭和56年度調査の瓦溜り(SK13下層)出土資料を中心に—」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集) 1987

長岡京跡調査だより

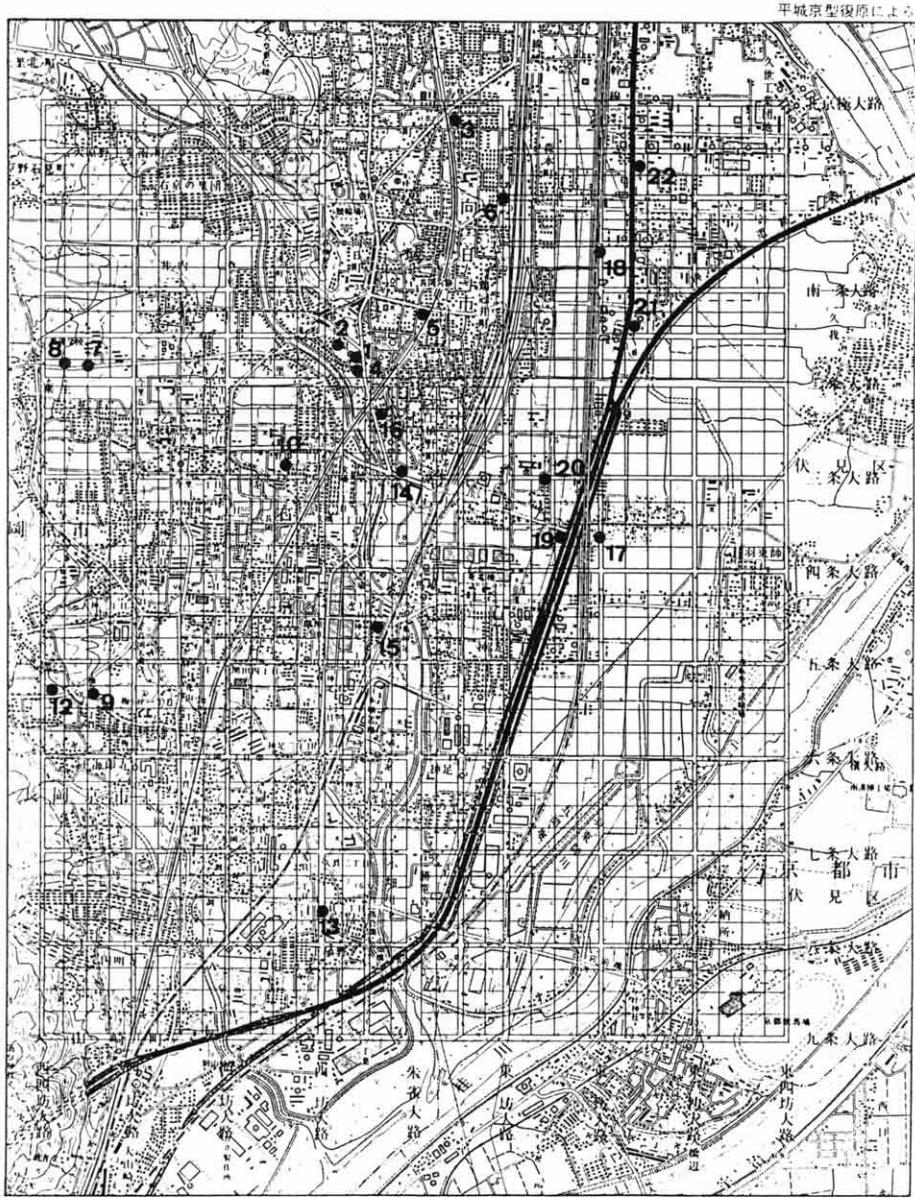
この長岡京跡では、年度当初の数多くの調査が行われています。この3月から5月にかけての3か月間に行われた長岡京跡の調査は、宮域6件・右京城10件・左京城6件の計22件ありました。これらの調査では、長岡京の道路側溝や建物跡が検出され、木簡や金銅製の鎌子(錠)等が出土するなどの成果を得ています。

それでは以下に、3月25日・4月22日・5月27日の長岡京連絡協議会で報告された調査のうち、主だったものについて簡単に紹介いたします。

調 査 地 一 覧 表

番号	次 数	地 区 名	調 査 地	調 査 機 関	調 査 期 間
1	宮内第185次	7AN20E	向日市上植野町馬立6-1	(財)京 都 府 埋	62. 1.26～ 3.12
2	宮内第187次	7AN20F	長岡京市滝ノ町1丁目17	(財)長岡京市埋	62. 3.16～ 3.27
3	宮内第188次	7AN6I	向日市寺戸町渋川 ²⁻²⁰ ₂₋₂₁	向日市教委	62. 4. 7～ 4.11
4	宮内第189次	7AN20E-2	向日市上植野町馬立19-2	向日市教委	62. 4.10～ 4.21
5	宮内第190次	7AN9O	向日市鶏冠井町山畑12-3	向日市教委	62. 5. 7～ 5.11
6	宮内第191次	7AN2A	向日市森本町下森本	向日市教委	62. 5.25～
7	右京第251次	7ANH13	長岡京市粟生川久保, 畑ヶ田	(財)京 都 府 埋	61.12. 9～ 62. 3.14
8	右京第255次	7ANHKB-2	長岡京市粟生川久保	(財)京 都 府 埋	62. 2. 6～ 3.20
9	右京第256次	7ANKTM	長岡京市天神2丁目127-1	(財)長岡京市埋	62. 2.24～ 2.27
10	右京第257次	7ANINE-5	長岡京市野添2丁目51-3	(財)長岡京市埋	62. 4. 8～ 5. 9
11	右京第258次	7ANINE-5	長岡京市奥海印寺太鼓山 ₂₀₋₃	(財)長岡京市埋	62. 5. 1～
12	右京第259次	7ANPOT	長岡京市奥海印寺岡本5-2	(財)長岡京市埋	62. 5. 6～
13	右京第260次	7ANQMZ	長岡京市久貝3丁目214-3	(財)長岡京市埋	62. 5. 6～
14	右京第261次	7ANFKR-3	向日市上植野町吉備寺 _{8,9-8}	向日市教委	62. 4.28～ 4.30
15	右京第262次	7ANMBB	長岡京市神足1丁目15-3	(財)長岡京市埋	62. 5. 7～
16	右京第263次	7ANFKK	向日市上植野町切ノ口26-1	向日市教委	62. 5.17～
17	左京第164次	7ANXWD	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京 都 市 埋	61.12. 1～ 62. 3.31
18	左京第169次	7ANEJS-7	向日市鶏冠井町十相	向日市教委	62. 2.13～ 5.12
19	左京第170次	7ANFMI	向日市上植野町南淀井	向日市教委	62. 2.23～ 3.24
20	左京第171次	7ANFMR	向日市上植野町持丸地内	向日市教委	62. 4.27～ 5.18
21	左京第172次	7ANEKD-2	向日市鶏冠井町小深田	向日市教委	62. 4.30～
22	左京第173次	7ANDI I-5	向日市森本町戌亥3	向日市教委	62. 5.15～

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

- 宮内第188次 (3) 向日市教育委員会
長岡宮の北辺官衙域推定地に当るが、中世の南北溝2条と、縄文時代～中世の遺物を含む自然流路が検出されたにとどまった。
- 右京第255次 (8) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
西四坊第2小路の推定地に当るが、平安時代以降のピット列等を検出したにとどまった。
- 右京第257次 (10) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
調査地は、右京三条二坊五町のほぼ中央に位置し、長岡京期の東西溝や掘立柱建物跡、弥生時代の自然流路等が検出された。掘立柱建物跡は、2間×3間の南北棟が1棟検出されている。また、中世の遺物として、銭貨(「唐国通宝」)等が出土している。
- 右京第259次 (12) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
調査地は、右京六条四坊十五町に位置し、長岡京推定域の西端に当る。この調査では現在、奈良時代と推定される掘立柱建物跡や、弥生・古墳時代の遺構が検出されている。
- 右京第260次 (13) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
西一坊大路の推定地に当るが、長岡京期の遺物を含む湿地状堆積等が検出されている。遺物としては、土師器・須恵器・製塩土器等のほか、埴輪が出土している。
- 右京第262次 (15) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
柱穴列や溝が検出され、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等が出土している。
- 左京第164次 (17) (財)京都市埋蔵文化財研究所
この調査では、計6面にわたる遺構面が確認され、第1面では、平安時代後期の掘立柱建物跡・井戸・溝・土壇・木棺墓・自然流路等が検出された。第2面では、東二坊大路の東西両側溝、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列跡・井戸・土壇・川状遺構等が検出されている。第3～6面では、奈良時代の条里坪境いや坪内の水田畦畔等が検出された。東二坊大路東西両側溝は、幅約3mを測り両溝間距離は、溝心で約24mある。西側溝には、約4.5mにわたって、両岸に杭跡が存在する。
遺物は、土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・軒平瓦

・和同開珎・神功開寶・銅製丸鞆・木簡・人形・斎串・櫛・箸・糸巻・漆器片・石鏃等が出土している。

左京第169次 (18)

向日市教育委員会

この調査では、長岡京の南一条条間大路南側溝や、長岡京期の掘立柱建物跡9棟・井戸3基・土壇・沼状遺構・祭祀遺構、縄文～弥生時代の自然流路等が検出された。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・軒平瓦・平瓦・丸瓦・漆器・匙状木製品・曲物底板・加工木・斎串・土馬・凝灰岩・銅鏃・縄文土器・墨書土器等が出土し、墨書土器には「備所」と記されている。なお、長岡京期の遺構は、2時期に分かれる。

左京第170次 (19)

向日市教育委員会

この調査地は、左京四条二坊十一町及び東二坊坊間小路の推定地に位置し、東二坊坊間小路の西側溝や、長岡京期の掘立柱建物跡・土壇・溝・自然流路等が検出された。掘立柱建物跡は、東西3間の規模で、柱間約1.9mを測る。

遺物は、土師器・須恵器・木簡・斎串・曲物底板・木皿等のほか、金銅製の鏝子(錠)が出土した。また、弥生土器・瓦器等も出土している。金銅製の鏝子は、東二坊坊間小路西側溝から出土した。金具に通す部分(根尾)を欠き、長さ4.3cm・幅1.5cmを測る。銅板を八角形に軋接し、両端及び銅部に計4か所凸帯が付く。凸帯間には、宝相華文の毛彫りと魚々子が配されている。これら装飾は、根尾が通る面を除く7面に施されている。

左京第171次 (20)

向日市教育委員会

この調査では、三条大路南側溝や、それと平行する長岡京期の溝、同じく長岡京期の南北溝や東西溝等が検出され、土師器・須恵器・墨書土器・木簡・斎串等が出土した。三条大路南側溝は、幅約1mを測り、それと平行する東西溝にはしがらみが存在する。

奥海印寺遺跡第2次

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査では、縄文土器片の出土した土壇、古墳時代の須恵器杯身片が出土した柵列跡、鎌倉時代の東西溝等が検出されている。

(山口 博)

財団法人 京都市埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(62. 6.30 現在)

理事長	福山 敏男 (京都府文化財保護審議会委員)	事務局長	荒木昭太郎
副理事長	樋口 隆康 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	事務局長次	中谷 雅治
理事	中沢 圭二 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	総務課	課長 田中 秀明
川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学工学部教授)	川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学工学部教授)	総務係長	安田 正人
上田 正昭 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学教養部教授)	上田 正昭 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学教養部教授)	主事	安達 佳明
藤井 学 (京都府立大学文学部教授)	藤井 学 (京都府立大学文学部教授)	調査員	橋本 清一 (山城郷土資料館派遣)
足利 健亮 (京都大学教養部教授)	足利 健亮 (京都大学教養部教授)	嘱託	富田 敦子 杉江 昌乃
佐原 真 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長)	佐原 真 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長)	//	今村 正寿
原口 正三 (大阪府立島上高等学校教諭)	原口 正三 (大阪府立島上高等学校教諭)	調査第1課	課長 中谷 雅治 (次長兼務)
藤田 价浩 (西芳寺貫主)	藤田 价浩 (西芳寺貫主)	企画係長	山口 博
小嶋 一夫 (京都府文化芸術室長)	小嶋 一夫 (京都府文化芸術室長)	調査員	田代 弘
上田 将 (京都府教育庁指導部長)	上田 将 (京都府教育庁指導部長)	嘱託	長関 和男
堤 圭三郎 (京都府教育庁文化財保護課長)	堤 圭三郎 (京都府教育庁文化財保護課長)	資料係主任	山口 博 (企画係長兼務)
荒木昭太郎 (常務理事・事務局長)	荒木昭太郎 (常務理事・事務局長)	主調査員	松井 忠春
		調査員	田中 彰 土橋 誠
監事	谷 利夫 (京都府監査委員事務局長)	調査第2課	課長 杉原 和雄
堂端 明雄 (京都府出納局長)	堂端 明雄 (京都府出納局長)	調査第1係長	辻本 和美
		主任調査員	引原 茂治
		調査員	増田 孝彦 荒川 史
		//	肥後 弘幸 細川 康晴
		//	森 正
		調査第2係長	水谷 寿克
		調査員	竹原 一彦 岡崎 研一
		//	三好 博喜 森下 衛
		//	鍋田 勇 鶴島 三寿
		調査第3係長	小山 雅人
		主任調査員	戸原 和人
		調査員	竹井 治雄 石尾 政信
		//	伊野 近富 石井 清司
		//	黒坪 一樹 岩松 保
		//	小池 寛 伊賀 高弘

センターの動向 (62. 3 ~ 5)

1. できごと
3. 5 長岡宮跡第185次発掘調査(向日市)
関係者説明会実施
3. 7 平安京跡(京都市)発掘調査第1回現地説明会実施
- 3.12 青野遺跡(綾部市)発掘調査現地説明会実施
栗ヶ丘古墳群(綾部市)発掘調査関係者説明会実施
- 3.17 長岡京跡右京第251次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施
- 3.24 府民ホール(仮称)起工式出席(荒木事務局長)
- 3.25 長岡京連絡協議会開催
- 3.27 第18回役員会・理事会一於：京都堀川会館一福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，藤井 学・川上 貢・佐原 真・原口正三・小嶋一夫・堤圭三郎の各理事，荒木昭太郎常務理事出席
- 3.31 退職職員辞令交付(別掲)
武田 浩理事退任
4. 1 組織改正，人事異動(別掲のセンター組織および職員一覧参照)
新規採用職員辞令交付式(別掲)
上田正昭・上田将理事新任，理事長・副理事長・他の全理事及び監事再任
4. 6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(大阪市)出席(荒木事務局長・中谷次長・杉原調査第2課長)
- 4.13 高山古墳群(丹後町)発掘調査開始
- 4.14 向日町競輪場改築工事完工式出席(荒木事務局長・杉原調査第2課長・石尾調査員)
平山城館跡(綾部市)発掘調査開始
- 4.16 退職職員辞令交付(別掲)
安井 茂監事退任
- 4.17 人事異動，辞令交付式(別掲)
堂端明雄監事新任
上人ヶ平遺跡(木津町)発掘調査開始
- 4.22 長岡京連絡協議会開催
5. 1 新規採用職員辞令交付式(別掲)
5. 6 南稻八妻城跡(精華町)発掘調査開始
5. 7 全国埋蔵文化財法人連絡協議会考古資料展(仮称)検討委員会(大阪市)出席(杉原調査第2課長・田代調査員)
谷内遺跡(大宮町)発掘調査開始
三宅遺跡(綾部市)発掘調査開始
5. 8 野崎古墳群(綾部市)発掘調査現地説明会実施
井辺古墳群(弥栄町)発掘調査開始
小西町田遺跡(綾部市)発掘調査開始
- 5.18 鳥取城跡(久美浜町)発掘調査開始
千代川遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 5.20 高山古墳群発掘調査現地説明会実施
- 5.21 全国埋蔵文化財法人連絡協議会考古資料展(仮称)検討委員会(京都市)出席(中谷次長・杉原調査第2課長)
- 5.21・22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会開催(於：平安会館)
議事

- (1) 昭和61年度事業報告及び収入支出決算について
監査報告
 - (2) 昭和62年度事業計画(案)及び収入支出予算(案)について
 - (3) 表彰規程の一部改正(案)について
 - (4) 昭和62年度表彰候補者の選考について
 - (5) 昭和62年度関係機関への陳情・要望(案)について
 - (6) 地区別研究活動等について
 - (7) (仮称)全国考古展の開催について
 - (8) コンピューター等導入研究委員会について
 - (9) その他
- 視 察
- 京都御所
 - 泉屋博古館
- 5.23 平安京跡発掘調査第2回現地説明会実施
 - 5.27 長岡京連絡協議会開催
 - 5.29 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(守山市)出席(荒木事務局長・杉原調査第2課長・田中総務課長)
- 2. 人事異動**
- 3.31 藤原敏晃 調査員 退職(弥栄町立弥栄中学校教諭に転出)
西岸秀文 調査員 退職(府立洛北高等学校教諭に転出)
 - 4. 1 森 正 調査員・今村正寿嘱託採用
 - 4.16 中西和之 総務課長 退職(京都府教育委員会に復職—総務課調査広報係長)
 - 4.17 田中秀明, 京都府教育委員会から派遣される(総務課長)
 - 5. 1 鶴島三寿調査員採用
 - 5.31 中西 修嘱託退職

受贈図書一覧 (62. 3~62. 5)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第104~115集, 考古遺物資料集 第7集
秋田県埋蔵文化財センター	秋田県埋蔵文化財センター年報5(昭和61年度), 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第2号, 秋田県文化財調査報告 第149~155集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡 一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ一, 大原Ⅱ遺跡・村主遺跡 一般国道17号線(月夜野バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ一, 洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡 一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集一, 研究紀要4, 荒砥上川久保遺跡 昭和50・51年度県営圃場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
(財)市原市文化財センター	市原市文化財センター年報(昭和60年度), 第2回市原市文化財センター遺跡発表会要旨
(財)君津郡市文化財センター	君津郡市文化財センターNo.3~4, 財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書 第8・10~11・13~19・22集, 千葉県富津市 飯野陣屋濠跡発掘調査報告書, 千葉県富津市 二間塚遺跡群確認調査報告書Ⅱ(昭和59年度)一富津古墳群周溝確認調査一, 君津市埋蔵文化財分布地図
(財)東京都埋蔵文化財センター 神奈川県立埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター年報6 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15~16, 一つ山遺跡, 泥牛庵脇やぐら群
山梨県埋蔵文化財センター	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第17・19集
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	原川遺跡 昭和60年度発掘調査概報, 内荒遺跡(遺構編)昭和60年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告, 静岡県埋蔵文化財調査研究所 研究紀要Ⅰ
(財)滋賀県文化財保護協会	新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要Ⅰ~Ⅱ, 県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査, 山ノ神遺跡発掘調査報告 国道1号京滋バイパス関連遺跡発掘調査報告, 国道161号線バイパス関連遺跡調査概要7 高島バイパス 新旭町内遺跡 発掘調査概要一吉武城遺跡一, 錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要Ⅰ
(財)東大阪市文化財協会	久宝寺遺跡発掘調査報告一久宝寺緑地公園内雨水貯溜池築造工事に伴う発掘調査一
高槻市立埋蔵文化財センター	高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書, 高槻市文化財調査概要Ⅺ 嶋

	上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報1986, 遺跡整備資料V~VI
(財)元興寺文化財研究所	中世庶民信仰資料, 要覧一創立20周年のあゆみ一
(財)鳥取県教育文化財団	鳥取県教育文化財団報告書23
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	昭和60年度道後今市遺跡 愛媛県県民文化会館・愛媛県総合福祉センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告書, 埋蔵文化財発掘調査報告書 第17~18集
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第5号
いわき市教育委員会	夏井廃寺跡I一県指定史跡夏井廃寺塔跡周辺範囲確認調査概報一
伊達町教育委員会	伊達町文化財調査報告書 第2~3集
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告書 第68・75~80集
木更津市教育委員会	千葉県木更津市 請西遺跡群確認調査報告書
小見川町教育委員会	小見川町内遺跡群発掘調査報告書(清水堆遺跡・小見川城址), 三分目大塚山古墳発掘調査報告
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告29
能都町教育委員会	石川県能都町 真脇遺跡
松本市教育委員会	松本市文化財調査報告 No.47~56
各務原市教育委員会	各務原市文化財調査報告書 第4~5号
滋賀県教育委員会	滋賀県中世城郭分布調査 5
今津町教育委員会	今津町文化財調査報告書 第7集
高月町教育委員会	高月町埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集
米原町教育委員会	米原町埋蔵文化財調査報告書VI~VII
和泉市教育委員会	府中遺跡群発掘調査概要・VII
東大阪市教育委員会	東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要28
八尾市教育委員会	八尾市文化財紀要2, 八尾市文化財調査報告13~15
赤穂市教育委員会	赤穂市文化財調査報告書18~19
加東郡滝野町教育委員会	加東郡滝野町埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表, 黒石山古墳群
天理市教育委員会	天理市埋蔵文化財調査報告 第3集
大和郡山市教育委員会	大和郡山市文化財調査概要5~7
榛原町教育委員会	神木坂古墳群 榛原町文化財調査報告 第2集
鳥取市教育委員会	鳥取市文化財報告書21~22
倉敷市教育委員会	倉敷市橋築弥生墳丘墓第V次(昭和60年度)・第VI次(昭和61年度)発掘調査概要報告
広島市教育委員会	広島市の文化財 第37集

南国市教育委員会	土佐国衙跡発掘調査報告書 第7集
大分県教育委員会	九州横断自動車道建設に伴う調査概要一日田地区一, 緒方条里内遺跡 県道竹田・野津線改良工事に伴う発掘調査報告書, 一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財調査概報 中津市伊藤田地区遺跡群, 一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財調査概報 中津市加未遺跡群, 1986年度九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報(湯布院一大分間)若杉遺跡・机張原女菰近世墓地, 雄城台第8次発掘調査の概要, 大分県内遺跡詳細分布調査概報6
杵築市教育委員会	杵築市埋蔵文化財調査報告書 第1集
野尻町教育委員会	野尻町文化財調査報告書 第2集
八戸市博物館	弥生時代一米づくりの始まる頃
秋田県立博物館	秋田県立博物館研究報告 第12号
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第4号
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第9~12集
千葉県立房総風土記の丘	千葉県立房総風土記の丘年報10
流山市立博物館	学校教材用 資料目録 第6集
成田山霊光館	浮世絵と絵本
大田区立郷土博物館	特別展 縄文の神秘—注口土器
世田谷区立郷土資料館	口訳 家例年中行事(上町大場家), 豪徳寺 文化財総合調査報告書
出光美術館	出光美術館報 第56号
小松市立博物館	所藏品目録Ⅵ
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡資料館紀要1986, 特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 XVIII—昭和61年度発掘調査整備事業概要—
鯖江市資料館	鯖江市埋蔵文化財調査報告書 西山古墳群
松本市立考古博物館	展示解説
沼津市歴史民俗資料館	沼津市博物館紀要11
名古屋市見晴台資料館	見晴台教室'86, 年報Ⅴ, 特別展 南区の歴史, 中区栄二丁目白川公園所在 白川公園遺跡発掘調査概要報告書, 守山区吉根 吉根地区埋蔵文化財発掘調査報告書, 名古屋市文化財調査報告 XVIII 天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書, 尾張元興寺跡第Ⅳ次発掘調査概要報告書
大阪府立泉北考古資料館	1986年度大阪府立泉北考古資料館の概要
東大阪市立郷土博物館	発掘20年のあゆみ
柏原市歴史資料館	柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1986年度, 松岳山古墳墳丘範囲確認調査概報1986年度, 玉手山8号墳墳丘測量調査概報

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	萬葉乃衣食住
橿原市千塚資料館	速報展 先人たちの遺産—昭和61年度発掘調査の成果から—
(財)日本はきもの博物館	はきものを作ろう
福岡市立歴史資料館	福岡市立歴史資料館研究報告 第11集
佐賀県立九州陶磁文化館	肥前地区古窯跡調査報告書 第4集
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	宇佐歴史民俗資料館年報 昭和60年度
山形大学人文・教養歴史学研究室 山形史学会	山形大学史学論集 第7号
東邦大学付属東邦高等学校考古学研究会	東邦考古 第12号, 千葉県旭市埋蔵文化財分布地図, 慶応義塾大学考古学研究会報告3
早稲田大学考古学会	古代 第83号
國學院大學考古学資料館	國學院大學考古学資料館紀要 第3輯
明治大学考古学博物館	明治大学考古学博物館館報 No.2, 明治大学考古学博物館案内展示図録
日本大学文理学部史学研究室	史叢 第38号, 金程向原遺跡 I
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学文学部研究論集 XCVIII 史学33 (考古学抜刷第2集), 考古資料ソフテックス写真集 第2集
愛知学院大学文学会	愛知学院大学文学部紀要 第16号
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館報告書 第17冊
関西学院大学考古学研究会	関西学院考古 第8号
岡山大学埋蔵文化財調査室	岡山大学構内遺跡調査研究年報3
熊本大学文学部考古学研究室	手広遺跡(概報)研究室活動報告20
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報II
山武考古学研究所	宗吾西鷲山遺跡, 玉造谷津遺跡, 千葉県芝山町御田台遺跡, 山武考古学研究所年報No.4
千葉市遺跡調査会	千葉市文化財調査報告書 第6・8~10集, 千葉・上ノ台遺跡, 千葉市官附遺跡発掘調査報告書, 仁戸名遺跡発掘調査報告書
国立国会図書館	日本全国書誌週刊版 No.1582・1586・1589
文化庁	全国遺跡地図 大阪府, 重要文化財目録
(財)文化財虫害研究所	文化財の虫菌害と保存対策
小金井市遺跡調査会	野川中洲北遺跡—水辺の狩人・その生活と環境—
都道32号線留原遺跡調査会	留原 都道32号線留原遺跡発掘調査報告書
名著出版	歴史手帖 第162~163号
(財)古代学協会	古代文化 第338~340号

大阪郵政考古学会	箕面の歴史年表, 資料論集
朝鮮学会	朝鮮学報 第121~122輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻23号
釜山大學校博物館	釜山大學校博物館遺跡調査報告 第10輯
京都府	比叡山
京都府教育庁指導部文化財保護課	重要文化財 黄梅院庫裏修理工事報告書
京都市文化観光局文化観光部文化財保護課	京都市の文化財
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告 第13集
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第17集
山城町教育委員会	山城町史 本文編
京都府立丹後郷土資料館	近代丹後の黎明(特別陳列図録20)
京都府立山城郷土資料館	企画展資料6『八幡正法寺の絵画と書跡』
京都府立総合資料館	京都府資料目録追録 No.3, 京都府立総合資料館所蔵行政文書簿冊 総目録2
京都市考古資料館	特別展「京都市域の群集墳」
福知山市文化資料館	福天地方の自然 第8集
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度
井上定清	韓式系土器研究 I
岡田登	五十鈴川上流域の遺跡と遺物
神谷正弘	大阪府立堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元
清水真一	桜井市の古文化財 5
関口功一	東国史論 第2号
中野知照	郡家町文化財報告書 山田窯跡群
中村準一	三木だいもん遺跡
福山敏男	(特別展図録第27冊)唐草文の世界—西域からきた聖なる文様—
水野正好	滋賀考古学論叢 第1集, 奈良大学考古学研究室調査報告書 第6集
安田博之	物理的・化学的分析による考古学研究, 島根県鹿島町奥才34号墳出土遺物の化学的分析

—編集後記—

暖い季節も終わり、また梅雨のうっとおしい頃になりましたが、情報24号が完成しました。

本号は、昭和62年度のはじめの号なので、今年度調査予定の遺跡と昨年度の調査成果をまとめたものを掲載いたしました。資料紹介では、國下氏が森本遺跡出土の人面付土器について、新しい観点から書かれたものを掲載することができました。この人面付土器は、大変著名なものですが、これについての研究はあまり多くないようですので、注目されます。

なお、当調査研究センターでは、昨年度に五周年記念誌として『京都府埋蔵文化財論集』第1集を刊行しましたが、今回、都出比呂志氏が紹介文を書いていただきました。記して感謝の意を表します。
(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第24号

昭和62年6月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)